

和仏法律学校講義録

著者	吾孫子 勝, 下村 宏
出版者	和佛法律學校
巻	2-26
ページ	1-56
発行年	1902-11-23
URL	http://hdl.handle.net/10114/5331

(明治三十五年十一月四日第三種郵便物認可 毎月十八日三、五、六、八、十日、十二日、十三日、十五、十六、十八、廿、廿一日、廿三日、廿五日、廿六、廿八、廿九日發行)

明治三十五年十一月二十三日發行

三十五年度 第二學年ノ二十六

和佛法律學校講義錄

第拾壹號

和佛法律學校

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3

第二學年第二十六號目次

民法債權 自第二章第二節(自二六)至同十四節(至二九)

法學士 吾 孫 子 勝

財 政 學 (自三三)至(三九)

法學士 下 村 宏

雜 報

○鐵物ノ試掘、探掘出願中ニ於ケル許可後ノ權利ノ賣買譲與ノ效力
○判事檢察登用第一回試驗合格者○校友會東京支部總會

ヲ定メタル借貸ハ爾後ニ於ケル借主ノ收益ノ減少ニ因リ減少セラルヘキノ理
ナク換言スレハ借主ハ不可抗力ニ因ル收益ノ減少ヲ理由トシテ借貸ノ減免ヲ
求ムル能ハサルノ理ニシテ若シ之ヲ求メ得ヘキノトセハ收益ノ豫想ノ外ニ
上ル場合ニ於テハ借主ハ借貸ノ増額ヲ承諾セサルヘカラサルニ至ルヘシ然レ
トモ收益ヲ目的トスル土地ノ賃借人即チ所謂小作人ハ賃借人ト經濟上地位ヲ
異ニスルモノアルヲ以テ特ニ保護ヲ加フルノコトノ公平ヲ得タルモノタリト
ハ古來諸國ノ認ムル所ニ屬シ羅馬法並ニ獨逸普通法ニ於テモ不可抗力ニ因リ
收穫力皆無ト爲ルカ又ハ非常ニ減少シタルトキハ賃借人ハ借貸ノ減額ヲ求メ
得ヘキノトシ數年ニ亘ル用益賃貸借ニ於テハ豊年ノ場合ト差引計算ヲ爲ス
ヘキノトセリ佛國民法モ第一千七百六十九條以下ニ於テ借貸ノ減免ニ關シ精
細ノ規定ヲ設ケ埃國民法ハ其第一千五百五條ヲ以テ一年ノ賃貸借ニ於テ非常ノ災
害ニ因リ收穫力平年ノ半以下ニ降ルトキニ限り借貸ノ免除ヲ認許シ一年以上
ニ亘ル賃貸借ニ於テハ其間ニ損益相償ヒ得ヘキノトシテ減免ヲ許サス獨逸
民法第一章案第五百三十四條モ亦公平ヲフ思想ニ基キ右ノ制度ヲ認メタルモ

090
1902
2-1-26

第二學年第二十六號目次

民法債權

自第二章第二節(自二六)
至同章第十四節(自二九)

法學士 吾孫子 勝

財政學

(自三〇)

法學士 下村 宏

雜報

○銀物ノ試掘探掘出願中ニ於ケル許可後ノ權利ノ實質與否ノ效力
○判事檢察官第一回試驗合格者○稅及會東京支部總會

090
1902
2-1-26

ヲ定メタル借貸ハ爾後ニ於ケル借主ノ收益ノ減少ニ因リ減少セラルヘキノ理
ナク換言スレハ借主ハ不可抗力ニ因ル收益ノ減少ヲ理由トシテ借貸ノ減免ヲ
求ムル能ハサルノ理ニシテ若シ之ヲ求メ得ヘキノトセハ收益ノ豫想ノ外ニ
上ル場合ニ於テハ借主ハ借貸ノ増額ヲ承諾セサルヘカラサルニ至ルヘシ然レ
トモ收益ヲ目的トスル土地ノ賃借人即チ所謂小作人ハ賃貸人ト經濟上地位ヲ
異ニスルモノアルヲ以テ特ニ保護ヲ加フルノコトノ公平ヲ得タルモノタリト
ハ古來諸國ノ認ムル所ニ屬シ羅馬法並ニ獨逸普通法ニ於テモ不可抗力ニ因リ
收穫力皆無ト爲ルカ又ハ非常ニ減少シタルトキハ賃借人ハ借貸ノ減額ヲ求メ
得ヘキノトセリ數年ニ亘ル用益貸貸借ニ於テハ豐年ノ場合ト差引計算ヲ爲ス
ヘキノトセリ佛國民法モ第一千七百六十九條以下ニ於テ借貸ノ減免ニ關シ精
細ノ規定ヲ設ケ埃國民法ハ其第一千五百五條ヲ以テ一年ノ貸貸借ニ於テ非常ノ災
害ニ因リ收穫力平年ノ半以下ニ降ルトキニ限り借貸ノ免除ヲ認許シ一年以上
ニ亘ル貸貸借ニ於テハ其間ニ損益相償ヒ得ヘキノトシテ減免ヲ許サス獨逸
民法第一章案第五百三十四條モ亦公平ヲフ思想ニ基キ右ノ制度ヲ認メタルモ

確定法文ハ之ヲ認メテ蓋シ上陳ノ如キ原因ニ出ツル收穫減少ノ危險ハ損害保
險契約ニ依リ之ヲ免ルルヲ得ヘキノモノナラス近時農業ノ範圍大ニ發達シテ耕
作以外牧畜養蠶ノ如キ收益アルヲ以テ損益相補償セラルルヲ得ト云フニ在ル
カ如シ然レトモ本法ハ専ラ公平ノ思想ニ基キ各地ノ慣習ヲ參酌シ借貸減免ノ
制度ヲ設クルノ必要アリト認メテ收益ヲ目的トスル土地ノ賃借人カ不可抗力
ニ因リ借貸ヨリ少キ收益ヲ得タルトキハ其收益ノ額ニ至ルマテ借貸ノ減額ヲ
請求スルコトヲ得ヘキノトシ宅地ノ賃貸借ヲ除外スル旨ヲ定メ第六〇九條
尙ホ賃借人カ不可抗力ニ因リ引續キ二年以上借貸ヨリ少キ收益ヲ得タルトキ
ハ契約ノ解除ヲ爲シ得ヘキノト定ム第六一〇條尙ホ梅博士民法要義參照

第四節 賃貸借ノ終了

賃貸借ノ終了即チ賃貸借ニ因ル債務關係ノ消滅ニ關シテ民法カ特ニ規定スル
所左ノ如シ
第一 契約ニ期間ノ定ナキ場合

此場合ニ於テハ當事者各自ハ何時ニテモ契約解除ノ申入ヲ爲スコトヲ得ヘク
賃貸借契約ハ其申入ノ後法定ノ期間ヲ經過スルニ因リテ終了ス第六一七條理
論ヨリ言ヘハ契約ニ期間ノ定ナキ場合ニ於テハ賃貸人ハ何時ニテモ物ノ返還
ヲ求メ得ヘク賃借人ハ又何時ニテモ之ヲ返還シテ契約關係ヲ終了セシメ得ヘ
キカ如シト雖モ賃貸借契約ハ素ト一方カ物ノ使用收益ヲ爲シ他ノ一方カ資金
ヲ受ケンカ爲メ之ヲ結フモノナルヲ以テ使用貸借ニ於ケルカ如ク貸主ノ意思
ニ依リ何時ニテモ契約關係ヲ終了セシメ得ヘシト爲スカ如キ(第五九七條第三
項)使用貸借ニ於テモ借主ノ利益ノ爲メニ第五百九十七條第二項ノ規定アリ
一方ノ意思ニ因リ何時ニテモ直チニ契約關係ヲ終了セシメ得ヘキノトセハ
相手方ヲシテ不慮ノ損害ヲ被ラシムルニ至ルヘク此事タルハ契約當時ノ當事
者ノ意思ニ反スヘキヲ以テ法律ハ契約ニ期間ノ定ナキ場合ニ於テ原則トシテ
ハ各當事者カ何時ニテモ解約ノ申入ヲ爲スコトヲ得ル旨ノ條理ヲ例外規定ハ
第六百十七條第二項ニ在リ宣示スルト同時ニ此解約ノ申入アリタル場合ニ於
テモ契約關係ハ其中入ニ因リ直チニ終了スルモノトセズ申テ更ニ相當ノ期間

繼續スヘキモノト定ム換言スレハ解約申入ノ後法定ノ期間ヲ經テ始メテ契約關係ヲ終了セシムヘキモノト定ム(注意)申入ハ申込ト同シカラス第五二一條以下參照) 上陳シタル保護規定ニ關シテハ(一)或ハ獨逸民法第五百六十五條並ニ第五百九十五條ニ於ケルカ如ク契約解除ノ通知ヲ爲シ得ヘキ時期ニ關シテ法定ノ制限ヲ設ケ一定ノ時期ニ於テスルニ非サレハ解除ノ通知ヲ爲ス能ハサルモノト定ムルアリ(二)或ハ奧國民法第百十六條ノ如キ唯契約ヲ解除セントスル者ハ使用並ニ收益ヲ目的トスル貸賃借ニ於テハ六箇月前ニ使用ノミヲ目的トスル場合ニ於テハ不動産ニ付テハ十四日前ニ動産ニ付テハ二十四時間前ニ解除ノ通知ヲ爲ササルヘカラスト定ムルモノアリ舊民法財産編第五百十一條モ此主義ニ屬ス(三)本法ハ折衷主義トモ云フヘク大體ニ於テ第二ノ主義ニ從ヒ解約ヲ申入アリタル後土地ニ付テハ一年、建物ニ付テハ三箇月、貸席及モ動産ニ付テハ一日間尙ホ契約關係ヲ存續スヘキモノトシ(第六一七條第一項)唯收穫季節ナル土地ノ貸賃借ニ付テハ其季節後次ノ耕作ニ著手スル前ニ解約ヲ申入ヲ爲スコト

ヲ要スト定ム(第六一七條第二項)右陳ヘタル第一項ノ規定ハ專ラ契約關係終了ノ後ニ於テ更ニ貸賃人カ其目的物ヲ他人ニ貸附タルニ付キ又ハ貸賃人カ之ト同様ノ物件ヲ借受タルニ付テ要スルキ時日換言スレハ爾後ノ貸賃ノ難易ニ應シテ當事者ヲ保護スヘキ期間ヲ定メタルモノニシテ第二項ノ規定ハ既ニ耕作ニ著手シタルモ未タ收穫ニ至ラサルニ契約關係ノ終了スルノ不利益ヲ防止スルノ規定ニ屬ス蓋シ此規定カタメハ縱令土地ノ貸賃借ニ於テハ解約申入ノ後一箇年ヲ經過シテ始メテ契約關係ノ終了ヲ見ルヘキ定アリトモ未タ收穫ニ至ラサルニ該關係ノ終了ヲ見ルノ不都合ヲ生スヘケレハナリ 以上ノ規定ハ當事者カ一タヒ貸賃借ニ付キ期間ヲ定メタルモ更ニ一方又ハ各自ニ該期間ノ半途ニ於テ契約ヲ解除スルノ權利ヲ留保シタル場合ニ之ヲ準用ス(第六一八條)蓋シ此ノ如キ場合ニ於テ當事者間別段ノ合意ナキニ於テハ前陳ノ如キ保護ヲ加フルヲ以テ實際ノ便宜ニ適シ隨テ又當事者ノ意思ニ合スルモノト謂フヘケレハナリ 第二 期間ヲ定アル場合ニ默示ノ再貸賃借

(甲) 默示ノ再貸貸借ノ必要
契約ニ期間ノ定アル場合ニ於テ期間ノ經過ニ因リ契約關係ノ終了スヘキヤ言
ヲ缺タスト雖モ此期間ノ經過後貸借人ニ於テ仍ホ物ノ使用收益ヲ繼續シ貸貸
人ニ於テ之ヲ知了シ居ルノ事例尠シトモ此ノ如キ場合ニ於テハ當事者間ニ
以前ノ契約ニ定メタル約款ノ下ニ貸借關係ヲ繼續スルノ默約アリタルモノ
ト認ムヘキヤ否ヤノ問題ヲ生ス而シテ之ニ關シテハ或ハ此ノ如キ問題ハ法律
ヲ以テ規定スヘキ事項ニ非スシテ裁判官ヲシテ各場合ノ情況ニ從ヒ判斷セシ
ムヘキ事項ニ屬スト主張スル者ナキニ非スト雖モ上ニ陳ヘタルカ如キ貸借人
カ使用收益ヲ繼續シ而シテ貸借人ニ於テ之ヲ知了シ居ルヲ事例ハ實際頗ル
頻繁ニシタ且此他ニ契約ノ默示ノ繼續ヲ認ムヘキ事實ノ存在セサルト竝ニ右
ノ如キ事實アル場合ニ於テ契約關係ヲ繼續シタルモノニ非スト認ムルコトハ
當事者雙方ノ利益ニ合セストヲ理由トニ基キ寧ロ法律ヲ以テ上陳シタルカ如
キ場合ニ付キ契約關係ヲ繼續伸長スルノ默約アリタルモノト認ムルノ必要ヲ
生ス此事ハ獨逸普通法ノ認ムル所ニシテ亦近世多數ノ法制塊太利民法第一

一四條同國千八百五十八年十二月十六日ノ勅令佛國民法第一七三八條第一七
五九條獨逸民法第五六八條ノ認ムル所ナリ
(乙) 默示ノ再貸貸借ノ要件
默示ノ再貸貸借ニ關シテハ諸國必スシモ其要件ヲ同シタモ(一)或ハ普通西國
普通國法典ノ如ク貸借人カ貸借人ニ對シテ契約關係ヲ繼續スルノ意思ヲ明示
シ貸借人ニ於テ一定ノ期間内ニ之ニ對シ異議ヲ唱ヘサルコトヲ必要トスルモ
ノアリト雖モ若シ此ノ如ク定ムルトキハ默示ノ貸借ノ繼續ニ關スル規定ノ
適用セラルヘキ場合ハ實際極メテ少數ニシテ却テ多數ノ場合ニ關シ準則ヲ存
セサルノ憾アルヘシ(二)然レトモ貸借人カ物ノ使用收益ヲ繼續スルコトヲ貸
人ニ於テ知了スルヲフコトノミヲ以テ默示ノ繼續アリタリト認ムルモ亦必ス
シモ其當ヲ得タルモノト謂フヘカラス蓋シ一方ニ於テ貸借人カ病氣其他ノ事
變ニ因リ貸借關係ヲ繼續セシムルノ意思ナキニ拘ハラス若干時間物ノ使用
收益ヲ繼續スルノ已ムヲ得サルコトナキニ非サルト同シク他ノ一方ニ於テ貸
借人カ使用收益ヲ繼續ヲ知リ得タルニ拘ハラス即時ニ之ニ對シテ異議ヲ唱ヘ

ナルカ若クハ其他ノ方法ヲ以テ其權利ヲ主張セサルコトアリトモ必スシモ契約繼續ノ意思アリト謂フヘカラス(三)之ヲ以テ契約關係ノ繼續アリタリト認ムルニハ獨逸民法第五百六十八條ノ如キ貸借人ハ使用收益ノ繼續ノ日ヨリ二週間内ニ貸借人ハ此事實ヲ知リタル時ヨリ二週間内ニ其相手方ニ對シテ反對ノ意思ヲ表示セサル限ハ默示ニ契約關係ヲ繼續シタリト認ムルカ如キ制度ヲ生ス

次ニ默示ノ繼續ニ關スル制度ハ近世諸國ノ法制ニ於テモ專ラ貸借ニ於テ一定ノ期間ノ定アル場合ニ付テノミ之ヲ認メ(普魯西普通國法典第三二三條佛國民法第一七三九條獨逸民法第五六八條隨テ此法則ハ期間ノ定ナクシテ締結セラレタル契約關係カ特ニ解除ノ意思表示アリタルニ因リ既ニ終了シタルニ拘ハラズ貸借人カ使用收益ヲ繼續シ貸借人カ此事實ヲ知ル場合ニ適用ナキモ後ノ場合ニ付テハ特ニ前陳ノ如キ規定ヲ要セサルコト言フ埃タサルヘシ

本法ハ第六百十九條ニ於テ唯(一)貸借ノ期間満了ノ後ニ於テ(二)貸借人カ貸借物ノ使用又ハ收益ヲ繼續スルコト(三)並ニ貸借人カ之ヲ知リテ異議ヲ述ヘオ

ルコトヲ要件トシ此ノ如キ場合ニ於テ當事者兩更ニ同一ノ條件ヲ以テ貸借ヲ爲シタルモノナリトノ推定ヲ設テ而シテ默示ノ再貸借アリト認ムルニハ其之ヲ認ムヘキ時期ニ於テ當事者雙方カ一般契約ノ成立ニ必要ナル資格例ヘハ行為能力等ヲ有セサルヘカラサルヤ勿論ナリ

(丙) 默示ノ再貸借ノ内容並ニ期間ニ關シテ當事者ハ前記ノ規定ニ依リテ再貸借ノ再貸借ニ關スル規定ハ當事者カ從前ノ契約關係ヲ持續スル意思ヲ有スルモノナリトノ推定ニ根據スルモノナルヲ以テ新契約ハ其繼續セラルヘキ契約ノ内容ニ變更ヲ生セスシテ使用收益ノ方法貸金ノ額等總テ從前ノ關係ト同シカルヘキモノト認ムルノ至當ナルコト言フ埃タス是レ我民法カ前貸借ト同一ノ條件ヲ以テ更ニ契約ヲ爲シタルモノト推定スル所以ナリ同様ノ規定獨逸民法第五六八條奧太利民法第一一五條等ニ一

然レトモ其契約ノ存續スヘキ期間ニ關シテハ諸國必スシモ其法制ヲ同シクセス(一)或ハ期間ノ合意ナカリシモノト認ムルモノアリ佛國民法第一七三六條第一七三八條第一七五九條索通瑞西等(二)羅馬法並ニ獨逸普通法ハ貸借契約カ

書面ニ依リ締結セラレタル非ナル場合ニ於テハ期間ノ合意ナカリシモノト認メ之ニ反シテ書面ニ依リテ締結セラレタル場合ナルニ於テハ前ノ契約ニ定メタル期間ト同一ノ期間伸長セラレタルモノト認ム(三)或ハ奧太利民法第千百十五條ノ如キ用益貸借ニハ本則トシテ繼續スヘキ期間ヲ一箇年間トシ其收穫カ一箇年以後ニ生スヘキ場合ニ於テハ一箇年以上一回ノ收穫ヲ畢ルニ必要ナル期間ト定メ其他ノ貸借ニシテ一年又ハ半年ノ後ニ賃金ヲ支拂フヘキモノハ半年間ト定メ之ヨリモ短キ貸借ハ前ニ契約ニ定メラルル期間タケ存続スルモノト爲スカ如キ各場合ニ應シテ精細ノ規定ヲ設クルモノアリ然レトモ此ノ如クナレハ數回契約ノ繼續アリタルモノト認メサルヲ得ザル場合ヲ生スヘク寧ロ期間ニ付キ合意ナキモノトシテ當事者ハ解除ニ依リ且此方法ニ依リテノミ契約關係ヲ終了セシメ得ヘキモノトスルヲ以テ當事者ノ意思ニ合シ且其利益ヲ保護スルニ足ルモノト謂ハサルヲ得ス本法ハ原則トシテ前貸借ト同一ノ條件ヲ以テ更ニ貸借關係ヲ結ヒタルモノト推定シタルコト前段ノ如クナリト雖モ期間ニ付テハ前貸借ト同一ノ期間貸借關係ヲ繼續スヘキモ

ナトスルハ多數ノ場合ニ於テ當事者ノ意思ニ反スルモノト認メ近世多數ノ法制ニ倣ヒテ期間ノ定ナクシテ貸借ヲ爲シタルモノト推定シ唯各當事者ハ何時ニテモ第六百十七條ノ規定ニ依リテ解約ノ申入ヲ爲シ得ヘキモノト定ム(第六百十九條但書右陳ヘタルカ如ク默示ノ再貸借ノ場合ニ於テハ當事者ノ暗黙ノ合意ニ依リ新契約ノ成立シタルモノニシテ前ノ貸借契約ハ期間ノ満了ニ因リ消滅シタルモノナルヲ以テ之ヲ擔保スルカ爲メニ設定セラレタル從タル權利タル對人擔保並ニ物上擔保モ共之ニ因リテ消滅スルヲ本則トスト雖モ本法ハ當事者カ敷金ヲ供シタル場合ニ限リ此擔保ハ後ノ契約ニ繼續スルモノト定ム(第六百十九條第二項)先取特權トノ關係ニ付テ第三百十六條參照)

第三 貸借人カ破産ノ宣告ヲ受ケタルトキハ貸借契約ニ期間ノ定アルトキト雖モ貸借人カ破産ノ宣告ヲ受ケタルトキハ貸借契約ニ期間ノ定アルトキト雖モ貸借人又ハ破産管財人ハ第六百十七條ノ規定ニ依リテ解約ノ申入ヲ爲スコトヲ得第六百二十一條前段蓋シ貸借人カ破産ノ宣告ヲ受ケタル場合ニ於テハ貸借人ハ縱令其義務ヲ履行スルモ將來借賃ノ全額ヲ受タルスト能ハスシテ損害ヲ被

ルナルヘク又破産管財人ハ質借權ヲ破産財團中ニ組入ルルモ十分之三ヲ利用
スル能ハサルヘク随テ結合其借貸ノ金額ヲ支拂ハサルニセヨ質貸借關係ヲ持
續スルコトハ破産財團ノ爲メニ利益ナリト謂フヘカラサルヲ以テナリ而シテ
此規定タル當事者ヲ保護スルカ爲メニ設ケタル所ナルヲ以テ當事者ノ各自ニ
相手方ニ對シ解約ニ因リテ生シタル損害ノ賠償ヲ求ムルコトヲ得サラシム第
六一九條後段但本條ニ依ル解約ノ場合ニ於テ法定ノ豫告期間ヲ守ルコトヲ要
スト爲シタルハ當事者保護ノ精神ヨリ出ツル當然ノ結果ナリトス然レモ
第四 契約解除ノ效力ニ關スル特別規定ニ依リテ當事者ハ其相手方ヲ
第五百四十五條ニ依レハ契約解除ノ效力ハ既往ニ遡リ各當事者ハ其相手方ヲ
原狀ニ復セシムルヲ要スルヲ本則トスト雖モ質貸借契約ノ解除ノ場合ニ付テ
第六百二十條ハ「解除ハ將來ニ向テノミ其效力ヲ生スヘキモノト定メ解除カ如
何ナル理由ニ因リ生シタルカニ付キ差別ヲ設ケス蓋シ若シ通例ニ從ヒ原狀ニ
回復スルノ義務アルモノトセシカ質貸借ハ當事者ノ一方カ資金ヲ受ケテ他
一方ニ物ノ使用收益ヲ許シ契約ナルヲ以テ一方ハ受ケタル資金ニ利息ヲ附シ

ヲ返還スヘク他ノ一方ハ其收取シタル果實ヲ返還セサルヘカラズ然レトモ果
實ハ之ヲ費消スルヲ常トスルカ故ニ解除ノ時ニ於テ現存スルコトハ極メテ稀
ナルヘク之ヲ費消シタル場合ニ於テ其價額ヲ返還セシメントスルモ之ヲ評定
シ難カルヘシ加之解除ノ通則トシテハ物ノ使用ノ對價ヲ支拂ハシメスト雖モ
質貸借ニ於ケル借貸ハ物ノ使用收益ノ對價ナルカ故ニ物カ果實ヲ生セサル場
合ニ關シテハ解除ニ方リ其對價タル使用ノ價額ヲ評定返還セシメサルヘカラ
スト雖モ此ノ如キハ其煩ニ堪ヘカラズ而シテ他ノ一方ニ於テ資金ハ目的物
ノ使用收益ノ對價トシテ當事者間ニ定メラレタルモノニ係リ資金ト使用收益
ノ實價トノ兩者ハ相對當スルヲ常ト認ムヘキヲ以テ兩者ヲシテ相殺セシメ質
貸借契約ノ解除ハ既往ニ其效力ヲ及ボサスシテ唯將來ニ向テノミ其效力ヲ生
スヘキモノトセリ但當事者ノ一方ニ過失アリタルトキハ之ニ對シ損害ノ賠償
ヲ求ムルコトヲ妨ケス蓋シ過失ニ因ル損害ヲ賠償スルコトハ契約ノ解除其モ
ノノ效力ニ非ザレハナリ

第七章 雇傭

人ノ勞力ハ經濟上有益ナル財貨トシテ物並ニ權利ノ傍ヲ獨立シテ給付ノ契約ノ目的ト爲ルコトヲ得ヘシ是ヲ以テ學者或ハ勞力ヲ給付スル契約トニ箇ノ體樣タル雇傭ト請負トヲ共ニ勞力ノ契約ヲフ名稱ノ下ニ概括シ諸國ノ法制モ亦之ヲ同一章中ニ規定スルモノアリ埃國民法ハ其第二十六卷第千百五十一條以下ニ於テ勞務ノ給付ニ關スル有價ノ契約ヲ下ニ二者ヲ併セテ規定シ我舊民法財產取得編モ其第十二章中ニ節ヲ分チテ之カ規定ヲ設クモ勞力ヲ供スルノ契約ハ現今ニ於テハ勞力ヲ與フル者ト之ヲ受クル者トノ合意ニ基クモノニシテ勞力ヲ給付スル有價ノ契約ハ統計上買賣ノ傍ヲ極メテ煩繁ニ生スル種類ノ契約ニ屬シ現今社會ノ狀態ハ勞力ヲ供給スル契約ト至大ノ關係ヲ有シ其制度ノ如何其發達ノ如何ハ直接ニ國ノ利益ニ影響スルヲ以テ各國皆營業條例習業契約條例船員法ノ類ヲ設ケテ數多ノ點ニ於テ契約ノ内容ニ干渉ヲ加ヘ契約者ノ自由ヲ制限シ又特ニ其一方ニ法定ノ義務ヲ課スルノ制ヲ存

ス我國ニ於テハ舊民法財產取得編第二百六十一條以下ニ於テ特ニ營業者ヲ保護スルノ規定ヲ設ケ又別ニ習業契約ノ一章ヲ存ス近時我國ニ於テ工場法ノ出テシトスルモ亦右陳ヘタル理由ニ根據スルモノト謂フヘシ然レトモ民法中ニ於テ如何ナル程度ノ干渉規定ヲ設ケヘキヤ又ハ全然之ヲ行政法ノ規定ニ讓ルヘキヤハ政策ノ問題ニ屬シ章ロ行政法ニ於テ論スヘキ事項ニ屬スルヲ以テ民法ノ問題トシテハ文明諸國ノ民法典ニ存スル規定ノ概要ヲ論スルニ止メントス

勞力ノ契約ハ現今ノ社會ニ於テ重キヲ爲スモノタルコト前陳ノ如シト雖モ羅馬法ニ於テハ勞力ハ概テ奴隸ノ供スル所ナリシヲ以テ此種ノ契約ハ寧ロ重要視セラレザリシモ之ニ屬スル言ハ羅馬ニ於テハ賃貸借ヲ分チテ物ノ賃貸借即チ今ノ所謂賃貸借勞務ノ賃貸借即チ今ノ所謂雇傭任事ノ賃貸借即チ今ノ所謂請負ノ三種ト爲シタルコト上陳シタルカ如クニシテ就中勞力ノ賃貸借ノ目的物ハ即チ奴隸自體ニシテ其勞務ハ物ノ果實並ニ獸類ノ果實ト同一視セラレタリ何トチシハ奴隸ハ法律上人ニ非スシテ財產ノ一部ヲ成スモノトモス

タレハナリ羅馬法ニ於テ人ノ勞力ヲ給付スルノ契約カ物ノ質貸借ト並ニ規定セラルタ前者ハ「ロカチオ」カオ、コンツラチオ、オベラ、ルムト稱セラレ後者ハ「ロカチオ」コンツラチオ、レイト云ハレタルコトモ茲ニ基因スルモノニシテ兩者ニ關スル法規カ大體ニ於テ同一ナリシコトモ亦實ニ之ニ基スル事也（前掲）以上ノ觀念ハ羅馬ニ於テ其自由市民カ勞力ヲ供シ仕事ニ從事スルニ至リタル時代ニ於テモ其變遷ハ徐徐ニ生シタルニテ當初ハ奴隸ノ境遇ヨリ解放セラレタル者カ勞務ニ服シ次テ必要上平民カ勞力ニ服シタリシニ基ク存續シ勞務ニ對シテ報酬ヲ支拂フコトハ奴隸ノ勞力ニ對スル報償ナリトセラレ居リシヨリ何人ト雖モ自己ノ體力ヲ供シテ報酬ヲ受クル者ハ自ラ奴隸ト同シク其身ヲ處置スルモノナリトセラレ勞力ノ給付ノ或種ノモノハ客觀的ニ奴隸的ノ勞力ナリト思惟セララルルニ至レリ再言スレハ其特徵ハ人カ物ト同シク報酬ニ對シテ使役セララルト云フニ在リキ此ノ如クナルヲ以テ對價ヲ受ケスシテ勞力ヲ供スルコトヲ以テ品位アルコトト認メ官吏トシテ又市民トシテ無報酬ニテ公共ノ事ニ從スト同様ニ私ノ生活ニ於テモ金錢ヲ得シカ爲メ他人ノ爲メニ自己ノ

能力ヲ費ササルヲ以テ居シトセリ是レ羅馬法ニ於テ前者ノ勞務ニ對シテ自由勞務ト稱スル所ニ係リ其特徵ハ取引ノ慣習上無償ニ給付セラルルトノコトニ在リタリ而シテ此種ノ勞務ニ對シテハ物ノ質貸借ニ關スル規定ヲ類推適用スルコト能ハナリシヲ以テ委任——無償ニテ事務ヲ管理スルノ委託ヲ受クルコト——ノ中ニ之ヲ加ヘ其結果委任ヲ概念ヲ擴張セサルヘカラサルノ必要ヲ生シ委任ハ羅馬法ニ於テハ法律行為ヲ爲スノ委託ト各般ノ事實上ノ勞務ヲ供スヘキ委託トヲ包含シタリ羅馬法ニ於ケル自由勞務ト不自由勞務トノ區別ハ主觀的標準即チ勞務其モノノ性質ニ因リ生シタルモノニ非スシテ客觀的ニ區別セラレ金錢ニ對シテ給付セラレサルヲ常トスル勞務ヲ以テ自由勞務ナリトセラレタリ例ヘハ圖書館ヲ監守シ下水ヲ掃除スルカ如キハ自由民ノ爲ササル所ニシテ專ラ奴隸ノ司リタル所ニ屬スルモ裁判所ニ於テ代理スルカ如キハ公權ヲ享有スル者ニ非ナレハ當ル能ハサルコトニシテ名譽トシテ其任ニ當レリ而シテ上陳二種ノ勞務ノ區別ハ常ニ消極的ニシテ不自由勞務ノ特徵ヲ具ヘザルモノカ自由勞務ナリトセラレ土地ノ測量醫術ノ作用、書記ノ勞務、教授ノ勞ノ如キ

ハ自由勞務ニモ不自由勞務ニモ屬スルコトヲ得タリ然レトモ從來無償ニテ供給シタル勞務ニ對シ報酬ヲ要求スルコトノ一般ニ行ハルルニ至リテヨリハ前記ノ區別ハ遂行セラサルニ至リタリシカトモ此場合ニ關シテハ法律ノ承認ヲ缺キ隨テ右ニ基キテ訴權ヲ行フコト能ハス應急ノ手段トシテ此種ノ委任のニ給付セラレタル勞務ニ付テモ合意ヲ以テホノラリウム即チ謝金ヲ定ムルヲ得ルコトト爲レリ現今ノ觀念ニ於テハ勞働ハ神聖ナリト云ハレ勞務ニ自由勞務ト不自由勞務トノ別ナク又人ノ品位ヲ高ムヘキモノト人ノ名譽ヲ貶スヘキモノトノ別アルコトナク所謂自由勞務モ亦一ノ勞務トシテ有償取引ノ目的タルヲ妨クルコトナシ隨テ之ト同時ニ勞務ヲ給付スルノ契約ハ之ヲ一箇獨立ノ契約トシテ認ムヘキモノニシテ羅馬法ニ於ケルカ如ク之ニ物ノ質貸借ノ規定ヲ用フヘカラサルナリ

勞力ヲ供スルノ契約ハ我民法ニ依レハ第一之ヲ勞力ノ目的タルヘキ事項ヨリ區別スレハ甲各種ノ行爲ヲ目的トシ得ヘキモノ即チ法律行爲ト事實上ノ勞務トヲ目的トシ得ヘキモノ即チ雇傭請負事務管理ノ如キモノト(乙)特定ノ事項ヲ

目的トスヘキモノ即チ委任寄託ノ如キモノトアリ(第二)報酬ノ有無ノ點ヨリ當ヘハ甲有償ナルコト雇傭請負ノ如キアリ(乙)無償ナルコト事務管理ノ如キアリ(丙)有償若クハ無償ナルコト委任寄託ノ如キモノアリト雖モ此等各契約ヲ概括スヘキ勞務ニ關スル一般の契約ノ規定ハ之ヲ存セス

第一節 雇傭ノ定義

雇傭トハ當事者ノ一方カ相手方ニ對シテ勞務ニ服スルコトヲ約シ相手方カ之ニ對シテ其報酬ヲ與フルコトヲ約スルニ因リテ其效力ヲ生スル契約ナリ勞務ニ服スル者ヲ勞務者ト謂ヒ之ニ對シテ報酬ヲ與フル者ヲ使用者ト謂フ賭成ニシテ有償ニ雙務ノ契約ナルコト法文ノ示ス所ナリ(第六二二三條)

第一 當事者ノ一方ハ相手方ニ對シテ勞務ニ服スルコトヲ約スルヲ要ス

(甲) 契約ノ目的タルヘキ勞務ノ種類ノ如何ヲ問フコトナク職工僕婢等ノ如キ身體上ノ勞務モ醫師教師辯護士等ノ如キ精神的勞務モ等シク契約ノ目的タルコトヲ得ヘシ新民法ハ獨逸民法第六百一十一條第二項ニ存スルカ如キ各種ノ勞

務カ雇傭契約ノ目的ト爲リ得ヘキ旨ノ明示ノ規定ヲ設ケスト雖モ舊民法財産編第二百六十六條醫師辯護士及ヒ學藝教師ハ雇傭人ト爲ラスト定メタル規定ヲ削除シテ近世ノ學理ニ則レルニ因リ勞務ノ種類ニ制限ナキコトヲ認ムルコトヲ得ヘシ但契約ノ目的タルヘキ勞務ハ法律ノ認許保護スル目的ノ爲メニ合意セラレ給付セラルルヲ要スルヤ勿論ナリ而シテ使用者ハ契約ニ依リ唯契約セラレタル勞力ヲ爲スヘキコトヲ相手方ニ求ムルノ債權ヲ取得スルニ止マリ其者ノ身體ニ付キ又ハ其者ノ勞働力自體ニ對シテ何等ノ權利ヲ取得スルコトナシ隨テ勞務ヲ供スヘキ者カ如何ナル程度マテ使用者ノ指圖ニ從フヘキヤハ專ラ其者ノ意思ニ依リ定マルヘキ事項ニシテ縱令勞務者カ使用者ノ指圖ニ從フコトノ一般ナルニモセヨ契約ノ要素ニ屬スルモノト認フヘカラス

(乙) 契約ハ勞務者カ長日月間勞務ニ服スヘキ旨ヲ定ムルコトヲ得ヘク——但第六百二十六條ノ規定ニ從フ——又一時的若クハ一回ノ勞務ヲ目的トスルコトヲ得ヘシ

(丙) 契約ノ目的物ハ勞務ヲ給付ニ止マリ勞力ヲ供給契約ハ寧ロ請負契約ニ屬

スヘクシテ雇傭契約ニ屬セズ

第二 當事者ノ一方ハ其相手方ノ勞務ニ對シテ報酬ヲ與フルコトヲ要ス

(甲) 其報酬ハ金錢其他ノ給付タルコトヲ妨ケス舊民法ハ所謂精神上ノ勞務ヲ雇傭ヨリ除外シテ其他ノ勞務ヲ以テ雇傭ノ目的ト爲シタル結果報酬カ年月又ハ日ヲ以テ定メタル給料又ハ賃銀ナルコト即チ凡テ金錢ナルコトヲ必要トシ(財産取得編第二百六〇條)國民民法第百五十一條モ金錢ヲ以テ報酬トスヘキ旨ヲ規定シ其他ノ物又ハ行爲ヲ對價トシテ勞力ヲ給付スル契約ハ雇傭ノ規定ニ從フ旨ヲ定ムト雖モ本法ハ近世諸國ノ法制ト同シク其報酬ノ種類ノ何タルヲ制限セス隨テ其報酬ハ金錢其他ノ有價物又ハ勞務タルコトヲ妨ケス

(乙) 當事者ノ一方ハ相手方ノ勞務其モノニ對シテ報酬ヲ與フヘキコトヲ約スルヲ要ス換言スレハ契約ノ目的ハ勞務其モノタルコトヲ要ス是レ請負契約ト差異ノ存スル所ニシテ請負契約ニ在リテハ仕事即チ勞務ノ結果成績ヲ以テ契約ノ目的トス

第三 何人モ使用者タルノ能力ヲ有ス法人ト雖モ亦然リ然レトモ勞務者ト爲

ルヘキ者ニ付テハ雇傭ノ性質上自ラ一定ノ制限ヲ生ス
(甲) 雇傭ハ勞務者ニ對シ身體ノ羈絆ヲ受クヘキ結果ヲ生スルヲ以テ該契約ヲ締結スルコトニ關シ能力又ハ權限ニ付キ特別ノ規定ヲ設クルノ必要ヲ生シ妻ハ夫ノ許可ヲ受クルコトヲ必要トシ(第一四條第三號親權者並ニ後見人ノ權限ニ關シテモ未成年者本人ノ同意ヲ得ルノ必要ヲ生ス)第八四條第九二三條第二項

(乙) 法人ハ請負契約ニ於テ請負人タルコトヲ得ヘキモ雇傭契約ノ勞務者ト爲ルコト能ハス蓋シ法人ハ自ラ勞務ニ服スルノ能力ヲ缺ケハナリ

第二節 雇傭ニ關スル特別ノ法規

人ノ勞力カ經濟上缺クヘカラサル手段ニシテ益其必要ヲ増加スル今日ニ於テ此勞力ヲ供給スル契約ノ適當ノ發達ヲ計ルコトハ國利民福ヲ増進スルノ上ニ於テ必要ナルコトハ明白ノ事實ニ屬ス詳言スレハ雇傭ハ必然ノ結果トシテ人ノ身體ヲ羈束スルヲ以テ被傭者ノ健康ト智識道德ノ進歩ト將來ノ生計トニ關

シテ殊ニ其長期ナル場合ニ於テ特別ノ保護ヲ加フルノ必要アリ又被傭者ハ通常勞力ノ需ナラサルモノニ屬スルヲ以テ其者ノ財產上ノ狀態ニ關シ特別ノ規定ヲ設クルノ必要ナシトセシ是ヲ以テ近世諸國ハ或ハ營業條例營業契約條例工場法等ノ行政法規ヲ以テ保護ノ規定ヲ設クルモノアリ又獨逸ノ如キ民法中ニ若干ノ原則ヲ定ムルモノアリ前者ハ之ヲ行政法ノ研究ニ讓リ茲ニハ唯民事法中ニ規定アルモノニ付キ其梗概ヲ說カシ

第一款 期間ニ關スル制限

雇傭契約ニ付キ最長期間ヲ定メ之ヲ超ユル契約ハ當事者ノ一方ニ於テ該期間ノ經過後任意ニ之ヲ解除シ得ヘキコトハ近世諸國ノ法制ノ認ムル所ニシテ專ラ社會政策上並ニ經濟上ノ理由ニ基ク蓋シ一定ノ期間ヲ超ユル雇傭契約ハ人身ノ自由ヲ羈束スルノ甚シキ勞務者ノ自由意思ヲ奪フノ結果ヲ生シ公益ニ害ナキニ非ナルト契約ノ期間長キニ失スルトキハ其期間内ニ經濟上ノ狀況ヲ變シテ勞務ノ價值ト報酬ト權衡ヲ失フノミナラス當事者ノ身上ニ變動ヲ生シテ

ナル旨ヲ定ム佛國民法第一七八〇條勞務者ノ終身間ヲ期シテ結ビタル契約ニ於テハ勞務者ハ地方ノ慣習ニ依リ定マラル豫告期間ヲ遵守シテ解除シ得ベク此場合ニ於テモ勞務ヲ供シタル期間ニ應ジテ報酬ヲ求メ得ヘキモノナリト解釋セラル(ツハハリニ佛國民法論第三卷第五七九頁獨逸民法モ亦人ノ一生ヲ期シ又ハ五年ヲ超ユル期間ヲ以テ結ビタル契約ニ於テハ五年ノ經過後ハ六箇月ノ豫告期間ヲ守リ義務者ヨリ契約ヲ解除シ得ヘキ旨ヲ定ム獨逸民法第六二四條皆同様ノ思想ニ基クモノト謂フヘシ

第二款 勞務者ノ報酬請求權ノ保障

雇傭契約ニ在リテハ勞務者ハ通常賃金ナク其勞務ニ依リテ受クル報酬ニ依ルシテ衣食スルヲ通常トスルヲ以テ或程度マテ其請求權ヲ擔保スルコトハ管ニ勞務者ノ利益ナルノミナラス國家ノ秩序並ニ國家經濟ノ上ヨリ之ヲ觀ルモ窮民ノ發生ヲ防テ利益アルヲ以テ諸國ノ法律ニ於テ之ヲ擔保規定ヲ設クルモノ少シトセス

第二款 勞務者ノ報酬請求權ノ保障

民法債權
履修 履修ニ關スル特別ノ法規

第一、勞務者カ勞務ニ依リ對價トシテ報酬ヲ受クルノ債權ハ其生活ノ資料ニ必要ナル範圍ニ限リ之ヲ差押スルコトヲ許サス民事訴訟法第六一八條第五號第六號第七〇五條第三號一獨逸民事訴訟法モ亦同様に規定ヲ存ス

第二、獨逸民法ハ其第六百十六條ニ於テ勞務者カ其一身ニ存スル理由ニ因リ過失ナクシテ比較的長カラサル時間勞務ヲ供スルコトヲ妨ケラルルトモ之ニ因リ報酬ヲ受クルノ權利ヲ失ハサル旨ヲ定ム

第三款 勞務者ニ對スル監護義務

勞務カ經濟の現象ノ一大要素ナルコト前陳ノ如クナルヲ以テ近世諸國概テ各般ノ法規ヲ以テ此一大勢力ヲ適當ニ安排シ其淵源タル勞務者ヲ監護スルノ手段ヲ定ム此特殊ノ法規ノ必要ハ人カ多少繼續シテ勞務ヲ供スル場合ニ於テ其身體健康精神上ノ狀態並ニ財產ヲ監護スルニ關シテ生シ又其從事スヘキ勞務ノ性質ニ因リ各特殊ノ利益ヲ監護スルニ付テ生シ是ヲ以テ營業的ニ勞務ヲ供スル者ニ關シテハ營業條例ナルモノヲ設ケルノ法制アリ(獨逸埃太利等ノ如シ)

又其從事スル勞務ノ特殊ノ性質ニ應ジ工業ニ付テハ工場法ノ如キ航海業ニ付テハ船員法ノ如キヲ定ムルモノアリ又一般ニ習業者ニ關シテ特別ノ法規ヲ設ケルモノアリ然レトモ此ノ如キハ政策ノ範圍ニ屬シ行政法ニ於テ論スヘキ事項ニ屬スヘキヲ以テ之ヲ省略シ茲ニハ唯民法中ニ存スル監護規定ニ付キ述フヘシ

第一、獨逸民法第六百十七條ハ繼續的雇傭ニ於テ勞務者カ使用者ノ家内ニ收容セラルル場合ニ於テハ使用者ハ勞務者ノ疾病ニ罹レル場合ニ於テハ六週間マテ(六週間以下ノ契約ニ於テハ其終了マテ)ハ必要ナル扶養ヲ加ヘ醫療ヲ受ケシムルノ義務アリト定メ唯勞務者カ故意又ハ大過失ニ因リ疾病ヲ招キタル場合ニ限リ之ヲ課セス其費用ハ疾病ノ期間内ニ付キ拂渡スヘキ賃金ト相殺シ得ヘキ旨ヲ定ム(獨逸民法ニ於ケル勞務者ノ報酬請求權ノ保障ニ關スル前歌ヲ參照スヘシ)

第二、獨逸民法第六百十八條ニ依レハ使用者ハ勞務ニ要スル場所設置器械ヲ仕事ノ性質ノ許ス限リ勞務者ノ身體生命ニ對スル危險ヲ防キ得ル様ニ設備ス

ルヲ要シ使用者ノ指揮ノ下ニ行ハルハ勞務ニ關シテモ亦同様ノ注意ヲ加ツルヲ必要トシ勞務者カ使用者ノ家内ニ收容セラルル場合ニ於テハ其起居スヘキ場所勞働時間並ニ休息時間ニ付キ勞務者ノ健康道德宗教ニ關スル必要ニ應ジ得ル様ニ安排スルノ義務アリテ定ムル權利ニ關シテハ前條ノ規定ニ依リ右ノ如キ規定ハ畢竟公益ヲ維持スルニ在ルヲ以テ同法ニ依ルモ使用者ノ負擔スル右ノ義務ハ契約ヲ以テ豫メ之ヲ拋棄シ又ハ制限ヲ許ナサル旨ヲ定アリ(獨逸民法第六一九條)

第三節 雇傭ノ效力

第一款 使用者ノ義務

第一報酬支拂義務
使用者ハ勞務者ノ勞務ノ對價トシテ之カ報酬ヲ支拂フノ義務ヲ負フ而シテ雇傭契約ハ勞務其モノヲ目的トスルコト前條ニ於テ如クナルヲ以テ苟モ勞務者ニ於テ契約ノ本旨ニ從ヒ事情ニ應ジテ勞務ヲ供シタル以上ハ即チ契約ヲ履

行シタルモノニシテ之ニ因リテ報酬ヲ求ムルコトヲ得ヘキ其勞務ノ結果ノ奈何ヲ問ハス其支拂ノ責ニ任セサルベカラズ其報酬支拂ハ時期ニ付テ別段ノ合意アリタル場合ノ外ハ勞務者ハ其約シタル勞務ヲ終ル後ニ非サレハ報酬ヲ求ムルコトヲ得ス是レ第六百二十四條第一項ノ規定スル所ニシテ慣習ヲ認メタルニ基クモノナリト云ハル同様ノ規定獨逸民法第六一四條前段然レトモ契約關係カ或時期ノ間繼續シ其間定期ニ報酬ヲ支拂フヘキ場合ニ於テハ當事者ハ其一定ノ時期ニ於ケル勞務ニ對シテ報酬ヲ定メタルモノト認ムヘキヲ以テ勞務者ハ其期間ノ經過後ニ於テ之ヲ求メ得ヘキモノト定メタリ(第六二四條第二項)同様ノ規定獨逸民法第六一四條第二項(一)ニ於テハ其權利ヲ第三者ニ讓渡スルコトヲ得ヘカラス蓋シ雇傭契約ハ當事者間互ニ特定ノ人ノ資格ニ著眼シタルモノト認メタル結果ナリ(同様ノ規定獨逸民法第六一三條後段)

第二款 勞務者ノ義務

第一 勞務者ハ契約ノ主旨ニ從ヒ使用者ニ對シ勞務ニ服スルノ義務ヲ有ス(第六二三條)

第二 勞務者ハ勞務ノ種類ニ因リ補助者ヲ用フルコトヲ妨ケス(例ハ病人ヲ看護スヘキ義務アル者カ補助人ヲ用スルカ如キト雖モ使用者ヲ承諾アルニ非サレハ第三者ヲシテ自己ニ代リテ勞務ニ服セシムルコトヲ得ス若シ勞務者カ此義務ニ違反シテ第三者ヲシテ代リテ勞務ニ服セシメタルトキハ使用者ハ契約ノ解除ヲ爲スコトヲ得ヘシ(第六二五條第二項第三項) 同様ノ規定獨逸民法第六一三條前段是レ亦雇傭契約ハ當事者相互間ノ對人的信用ニ基クモノト認メタル結果ニシテ本法カ勞務者ニ對シテ此制裁ヲ設ケタルニ拘ハラス使用者カ勞務者ノ承諾ヲ得スシテ其權利ヲ第三者ニ讓渡シタル場合ニ付キ此種ノ制裁ヲ規定セサル所以ハ使用者カ假ニ其權利ヲ讓渡スルモ其讓渡ハ無効ニ屬シ勞務者ハ之ニ因リ毫モ影響ヲ受クルコトナク依然使用者ニ對シ勞務ニ服シ得ヘク特ニ使用者ニ對スル制裁ヲ必要トセスト雖モ使用者カ假ニ第三者ヲシテ自己ニ代リテ勞務ニ服セシムルニ於テハ使用者ハ直接ニ影響ヲ被ルヘケレハ

第四節 雇傭ノ終了

第一 契約ニ期間ノ定ナキ場合ハ第六二八條ノ規定ニ依リ第六二六條契約ニ期間ノ定ナキ場合ニ於テハ各當事者ハ何時ニテモ解約ノ申入ヲ爲スコトヲ得ヘク此場合ニ於テハ雇傭ハ解約申入ノ後二週間ヲ經ルニ因リテ終了ス(第六二七條第一項然レトモ期間ヲ以テ報酬ヲ定メタル場合例ハ毎月毎月、毎六箇月、毎年若干ノ報酬ヲ支拂フヘシト定メタル場合ニ於テハ解約ノ申入ハ次期以後ニ對シテ之ヲ爲スヘク而モ其申入ヲ爲スヘキ時期ニ付テハ當該期間ノ前半ニ於テ之ヲ爲シ得ヘキモノト定メ(第六二七條第二項六箇月以上ノ期間ヲ以テ報酬ヲ定メタル場合ニ於テハ解約ノ申入ハ三箇月前ニ之ヲ爲スコトヲ要スト定メ(第六二七條第三項)其ニ當事者ヲ保護スルノ規定ニ屬ス(第六二七條第二項) 契約ニ期間ノ定アル場合ハ第六二八條ノ規定ニ依リ第六二六條契約ニ期間ノ定アル場合ニ於テハ契約關係ハ其期間ノ滿了スルニ因リテ消滅

スルヲ原則トス然レトモ第六百二十六條所定ノ場合ニ於テハ五年ノ期間ノ經過後ハ何時ニテ契約ノ解除ヲ爲スコトヲ得ヘク勞務者ハ雇傭ノ期間満了後引續キ勞務ニ服シ使用者カ之ヲ知リテ異議ヲ述ヘサル場合ニ關シ第六百二十九條ノ推定ヲ設ク所謂默示ノ再雇傭是ナリ

第三ノ期間ノ定アル場合ト否トヲ問ハス使用者カ破産ノ宣告ヲ受ケタルトキハ勞務者又ハ破産管財人ハ第六百二十七條ノ規定ニ依リテ解約ノ申入ヲ爲スコトヲ得ヘク此場合ニ於テハ各當事者ハ解約ニ因リテ生シタル損害ノ賠償ヲ請求スルコトヲ得ヘカラス(第六三一條)同條ノ規定獨逸破産法第一九九條蓋シ前陳第六百二十一條ト其精神ヲ同シウスル規定ナリ

第四ノ期間ノ定アル場合ト雖モ已ムコトヲ得サル事由アルトキハ各當事者ハ直チニ契約ノ解除ヲ爲スコトヲ得ヘシ(第六二八條是レ獨逸民法第六百二十六條ニ於テ重大ナル事由アルトキハ各當事者ハ豫告期間ヲ遵守スルコトナクシテ契約ヲ解除シ得ヘキ旨ヲ定メタルト同一般ニ屬シ要スルニ勞務者ノ自由ヲ重シ之ヲシテ其品位ヲ保タシメ奴隸的境遇ニ陥ルヲ防止スルノ規定ニ屬シ同

ノ納税力ノ多少ニ比例シテ直接ニ徵收スルカ又ハ負税者ノ何人ナリヤ且ツ其負税者ノ納税力ニ比例スルヤ否ヤヲ問ハス間接ニ徵收スルカヲ要點ト爲セルモノナルカ故ニ其納税力ニ比例スルニハ所謂比例率ナルモノヲ以テスルト累進税率ヲ以テスルトハ毫モ氏ノ論旨ヲ輕重スルニ足ラサルモノナリトス

第四說 本說ハ負擔ノ所在ヲ以テ別チタル直接税及ヒ間接税ノ形式上ノ區別ハ事實租税負擔ノ轉嫁カ必ス之ニ相協ハサルコト稀ナラサルニ由リ立法者ノ意思ヲ以テ二者ノ區別ノ標準ト爲ス者ナリ此說ハ既ニミル以來多數ノ學者ニ由リ唱ヘラレタル所ニシテワグナルモ之ニ定義シテ直接税トハ立法ノ目的上納税者ヲシテ同時ニ負税者タラシムルヲ以テ其負擔ヲ他人ニ轉嫁スルコトヲ豫期セス又轉嫁セザルモノナリ間接税トハ立法ノ目的上納税者ヲシテ負擔稅者タラシメサルヲ以テ其負擔ヲ納税者以外ノ負税者ニ移轉スルコトヲ豫期シ又ハ移轉スルノ方法ヲ立テシモノナリト云ヘリ

此ノ如ク直接税間接税ノ學理上ノ分類ハ負擔ノ所在ヲ以テ之カ標準ト爲スコト現時一般ノ通說ト爲レルト共ニ又一方ニ於テハ學理上ノ分類ニ對シテ絕對

ノ非難ヲ試ミル者續出スルニ至レリ其消極論ノ論旨ハ大體ニ於テ次ノ二點ニ歸セリ
第一租税ハ必スシモ其負擔ノ轉嫁ニ付キ絶對的ノ性質ヲ有スルモノニアラス是レ立法者カ負擔ノ轉嫁ヲ目的トスルノ有無ニ據リテ二者區別ノ標準ト爲セ
ルニ因リテ明カナル所ナリトス既ニ立法者カ一片ノ希望ニ過キサル以上ハ或ハ其希望カ正當ナルモ客觀的事情ノ變更ニ因リ或ハ其希望カ當ヲ得サルニ因リ長期間ニ於テ其目的ノ全部又ハ一部カ豫期ノ希望ヲ満足スルコト能ハサルヘキニ至ルハ當然ニシテ事實上直接税ノ負擔カ納税者以外ニ轉嫁シ間接税ノ負擔カ轉嫁ヲ止メ又多クノ場合ニ於テ二税共ニ或ハ負擔ノ一部分擔ト爲リ或ハ負擔ノ一部消滅ト爲ルコトアルハ吾人ノ常ニ目撃スル所ナリ殊ニ租税ノ種類ニ依リテハ性質上負擔ノ何レニ歸スヘキモノナルヤ之ヲ識別スルニ難キモノ少カラス例ヘハ取引所税ノ負擔ハ取引所ニ在ルカ又ハ取引ヲ爲ス者ニ在ルカ又取引ヲ爲ス者ニ在リトスルモ取引貨財ノ讓渡人買受人孰レニ屬スヘキカ明カナラサルカ如シ此ノ如ク直接税間接税ノ區別ヲ負擔ノ所在ニ據リテ決ス

ルハ租税其モノノ性質上之ヲ定ムルニ難キモノナラサルノミナラス縱令其負擔ノ所在カ容易ニ決定シ得ヘキモノト雖モ客觀的ニハ長期間ニ於ケル一般經濟社會ノ變遷ニ因リ主觀的ニハ税率ノ高低ト其他負擔ノ體様ノ如何トニ依リ豫期ノ目的ヲ達スルコト能ハサルコト多キハ事實屢見ル所ナルヲ以テ此分類ハ何レノ方面ヨリ觀察スルモ有名無實ノ分類ニシテ何等ノ實益ヲ與フルコトナク徒ニ財政上經濟上無用ノ繁雜ヲ増加スルモノナリ
第二負擔ノ轉嫁ノ問題ハ財政上利害關係ヲ有スルコト極メテ薄弱ナリ蓋シ負擔ノ轉嫁ハ租税ノ種類ニ依リテ之カ識別ヲ爲スニ困難ナルノミナラス又常ニ立法者ノ希望ニ稱フモノニアラス直接税ニシテ最も絶對不動ノモノトシテ認メラルル所得税ノ如キ其資本家特ニ債權者ノ負擔スヘキモノカ間接税ニシテ債務者ニ負擔セシムルハ事實ニ於テ稀ナリト爲ササル所ナリ蓋シ直接税間接税ノ區別ノ實益ハ其負擔カ何レニ轉嫁スルヤノ問題ニアラスヤテ此區別ニ伴フ租税行政ノ方法ニ存ス之ヲ反面ヨリ言ヘハ主トシテ納税者ノ租税納付ノ方法ニ存セリ即チ直接税ハ法規ノ定ムル所ニ從ヒ其負擔者カ一定ノ時期一定ノ場

所ニ於テ指定ノ額ヲ納付スルモノナリ間接税ハ中人ニ依リテ國庫ニ納付セラレ實際ノ負税者ハ隨時自己ノ便宜ナリト信スル所ニ於テ任意ノ額ヲ支拂フモノナリ故ニ直接税間接税ノ區別ハ負擔ノ移轉ノ有無中人存在ノ如何ニアラスシテ其賦課徴收ノ手續及ヒ其數額カ納税者ノ任意ニ因リテ變動スルヤ否ヤニ存ス所謂第三說ノ租税ノ數額カ納税力ニ對シテ比率ヲ有スルヤ否ヤヲ以テ標準ノ一ト爲セル所以ノモノハ又將ニ此原因ヲ觀察セタルモノニ外ナラサルナリ

上述べタル所ノ批難ハ皆多少ノ真理ヲ包含スルモノニシテ之ヲ各國ノ租税制度ニ徴スルモ直接税間接税ノ區別カ學理上ノ分類ト常ニ其範圍ヲ一ニスルコトナク孰レモ多クハ實際上ノ便宜ニ基キ或ハ課税納期ノ確定ノ有無或ハ收入金額確定ノ有無或ハ手續上檢査ヲ要スルノ多少其他區區ノ標準ニ依リ歸一スル所ナキヲ觀ルヘシ其實際上分類トシテ廣ク行ハレ殊ニ佛蘭西ニ於テ用フラルル種別ハ臺帳税及ヒ税表税ノ別トス臺帳税及ヒ税表税ハ形式上ヨリ定義ヲ下セハ臺帳ニ依ル租税ヲ臺帳税ト謂ヒ税表税ニ依ル租税ヲ税表税ト謂フ又實質

上ヨリ定義ヲ下セハ連續シテ存在スル一定ノ課税物件ニ賦課スル租税ヲ臺帳税ト謂ヒ一時ノ事實ニ對シテ賦課スル租税ヲ税表税ト云フ所謂ボリユー氏ノ行政上ノ便宜ヲ標準ト爲セル分類ハ殆ト其實質ニ於テ趣ヲ一ニスル所アリ即チ氏ノ定義ニ依レハ直接税トハ直接ニ人民及ヒ人民ノ財產ノ所有若クハ使用等總テ確定不動ノモノニ賦課シ豫メ收入ノ總額並ニ收入時期ノ一定スルモノヲ謂ヒ贈與交換買賣等ノ事實アルニ當リテ賦課スル租税ニシテ收入ノ數額及ヒ徴收時期ノ確定シ難キモノヲ間接税ナリト云ヘリ故ニ此分類ハ學理上ノ分類ト其間ニ標準ヲ異ニスル所アルヲ以テ其範圍亦自ラ合致セサル所アリ例ヘハ和積税贈與税ノ如キハ總然タル直接税トシテ認メラルル所ナレトモ行政上ノ分類ニ依レハ税表税トシテ認メラルルカ如ク之ヲ要スルニ直接税間接税ノ區別ニ對シ負擔ノ所在ヲ標準ト爲スコトハ租税立法ノ上ニ於テ租税公正ノ原則ヲ保持スル上ニ於テ重要ナリト雖モ租税ノ種類ニ因リテハ之カ負擔ノ所在ヲ認定シ難キモノ尠カラサルノミナラス經令之カ所在ノ明カニ認定シ得ヘキモノモ固ヨリ永久不動ニ確定スルモノニアラサルヲ以テ臺帳税及ヒ税表税ノ

分類カ事實ニ於テ行ハルルコト固ヨリ性ムニ足ラサルナリ

第四章 租稅ノ分配

租稅分配ノ問題ハ租稅公正ノ問題ト其性質ヲ一ニスルモノナリ即チ如何ニスレハ租稅ノ負擔カ一般ニ普及セラレ且ツ納稅者間ニ於テモ負擔カ平等ニ分配セラレルヤヲ研究スルモノナリ租稅分配ノ一般平等ヲ研究スルハ道德上政治ノ問題ナルト共ニ經濟上財政上ノ問題ナリ故ニ租稅ノ分配ハ實ニ事實ニ於テ公正ナルヲ以テ足レリトセス其公正ナルコトヲ一般人民ニ公認セシムルコトヲ要ス故ニ租稅ノ賦課徵收ハ現狀ノ許ス限リ社會ニ其公正ナル所以ヲ實現セシメ一般人民ニ租稅分配ニ關スル原理ヲ識知セシメサルヘカラス今日ノ國民經濟ノ下ニ於テハ國民ノ納稅力ニ應ジテ租稅ヲ徵收スルヲ以テ最も公正且ツ最も一般ニ公認セラレルモノタルコトハ曩ニ租稅ノ觀念ノ下ニ於テ述ヘタル所ナリ故ニ茲ニハ此觀念ニ基キテ次ノ三問題ニ付キ研究スルコトヲ要ス

第一 比例稅及ヒ累進稅論

第二 免稅及ヒ輕稅論

第三 重複稅論

是ナリ

(第二及ヒ第三ノ問題ハ前ニ他ノ方面ヨリ其大體ノ觀念ヲ述ヘシヲ以テ茲ニ之ヲ略ス)

第一節 比例稅及ヒ累進稅ノ沿革

納稅力ヲ以テ課稅ノ標準ト爲スヘシトノ學說ハ遽ク其源ヲ「ボードン」ニ發シ其後「アダム・スミス」カ四大原則ノ第一原則トシテ租稅ハ國民ノ實力ニ應ジテ負擔スヘキモノタルコトヲ説キテヨリ學說實際共ニ廣ク行ハルルニ至レリ實力課稅說ハ佛蘭西大革命以前ニ於ケル課稅ノ不平等ニ對シテ發生セルモノニシテ當時比例稅ノ學說熾ニ起レリ租稅ナルモノハ人民ノ財產所得ニ比例シテ賦課スヘシト唱道セラレタルハ主トシテ貴族僧侶等ノ免稅ニ對セルモノニシテ之ヲ租稅一般ノ原則ニ對スル比例說ト稱スルコトヲ得ヘシ其後佛蘭西ノ革命ト

其他國ニ及ホセル變動ハ納税力ヲ有スル一部階級ノ負税ノ特權ヲ根底ヨリ破壞シ租税一般ノ原則カ普ク認メラルルニ至リテヨリ比例税ハ一變シテ租税平等ノ原則ニ對スル比例税トシテ累進税ト相對抗スルモノト爲レリ即チ比例税トハ課税物件ノ價格數量ニ應シテ同一ノ税率ヲ課スル所ノ租税ヲ謂ヒ累進税トハ主トシテ課税物件ノ價格又ハ數量ニ應シテ加ノ税率ヲ課スル租税ヲ謂フモノニシテ其論點ハ一ニ税率ヲ變更スルノ有無ニ存セリ故ニ均シク比例税累進税ト稱スルモノニシテ其課税物件ニ付テ或ハ所得ノ總額ニ課スル場合アリ或ハ制限的比例税又ハ累進税ト稱シ所得ヲ以テ標準ト爲スモ或ハ所得ヨリ必要費ヲ控除シ或ハ所得ノ混成物ヲ分析シテ多少ノ變更ヲ加フル場合アリ其税率增加算定ノ方法限定生計費ノ免除等其間ニ幾多ノ體裁ノ異動ヲ生シ得ヘキモ此等ハ比例税ト累進税ノ區別ノ要素ト觀ルヘキモノニアラサルナリ

累進税ノ學說ニ付テハ前世紀ヨリ今世紀ノ前半ニ於テ「モンテスキュー」「ルソー」「老ミラボー」「セイ」「ガルニエール」等積極論ヲ主張セシ者尠カラサリシモ其學說實際ニ於テ旺盛ヲ極ムルニ至リシハ社會政策學派ノ勃興ニ始マリ地地利

「アッタクス」「ウキーゼ」獨逸ノ「ラグナル」「コーン」等其最モ有名ナルモノトス然レトモ近時猶ホ英國ノ「マラカロク」「バスタープ」佛蘭西ノ「ボリユ」「ローバリー」獨逸ノ「グナイス」ヘルマン」等ノ大家ニシテ比例税ヲ主張スル者又尠カラス累進税論者ノ論點モ各種ノ租税ニ通シテ絕對ニ累進税ヲ主張スルニアラスシテ之ヲ各國ノ立法例ニ徴スルモ累進税ヲ課スヘキ租税ノ種別ハ主トシテ所得稅財產稅和積稅登錄稅及ヒ印紙稅等ニシテ其他ノ租税ニ至リテハ殆ト累進稅法ノ實行ヲ見ルコトナシ

茲ニ論述スル所ハ累進稅ヲ如何ナル範圍マテ適用スヘキヤノ程度論ニ在ラスシテ累進稅ナルモノカ租稅ノ原則ニ適合セルモノナルヤ否ヤノ性質論ニ在リ故ニ先ツ累進稅ニ對スル積極及ヒ消極論ヲ叙述シ終ニ之ニ對スル批評ヲ試ム

第二節 累進稅ニ對スル積極論

第一款 純正經濟學上ノ積極論

純正經濟學上ノ積極論ハ主觀客觀兩様ノ方面ヨリ均シク之ヲ説明スルコトヲ得ヘレ客觀的ニ説明スレハ納稅力ノ增加率ハ所得ノ增加率ヨリ大ナリト云フニ在リ換言スレハ收入ノ增加率ハ支出ノ增加率ニ比シテ小ナリト云フニ在リ尙ホ詳言スレハ收入ト支出トハ互ニ相高低スルモノナルモ支出ノ屈伸力ハ收入ノ屈伸力ニ比シテ小ナリト云フニ在リ即チ餘裕ノ蓄積ヲ目的トスヘキ私人經濟ニ在リテハ收入額増加スルニ從ヒ收入額ト支出額トノ差異ノ比率ハ遞増シ又ハ遞増シ得ヘキモノナリ今實例ヲ以テ言ヘハ收入年額千圓ノ者カ生産費生計費等ニ用フル支出額四百圓ニシテ收入ニ對シ四割ノ比率ヲ有スルモノト假定スルトキハ收入年額一萬圓ニ増加スルモ其支出額ハ同一ノ比率ヲ以テ四千圓ニ上ルモノニアラス即チ支出ノ增加率ハ收入ノ增加率ニ伴フモノニアラスシテ收入額ノ増加スルニ從ヒ收入ト支出トノ差異ハ常ニ收入ニ對シテ一定ノ比率即チ六割ヲ維持スルモノニアラスシテ其比率自體カ又増加スルモノナリ故ニ一方ニ於テハ收入カ如何ニ増加スルモ支出ハ必スシモ同一ノ比率ヲ以テテ増加スルコトナキヲ原則トシ一方ニ於テハ收入カ如何ニ減少スルモ支出ハ限

定生計費以下ニ降ルコトヲ許ササルモノナリ

此觀念ヲ主觀的ニ納稅者カ課税ニ因リテ受クル所ノ侵害ノ程度ヨリ觀察スルモ亦同一ノ結論ヲ生スベシ即チ主觀的ノ觀察トハ納稅者カ課税ノ爲メニ受クル所ノ苦痛ヲ標準ト爲スモノナリ「モボン」「ワルラス」「テングル」等ハ所謂最終效用說又ハ限定效用說ニ依リテ純正經濟學上ノ學理ヨリ此觀念ヲ説明セリ即チ實財ノ效用ハ其分量ノ増加スルニ從ヒテ却テ之カ減少ヲ來スモノナルカ故ニ所得モ亦之ト同シタ一箇人ノ得ル所ノ所得額増加スルニ從ヒ其效用ノ程度ヲ減少スルモノナリ故ニ所得ノ分量増加スルニ隨ヒ其所得ノ一部ヲ納稅スル苦痛ハ益減少スヘシ然ルニ一方ニハ自由所得ノ増加率ハ收入額ノ増加率ニ比シテ大ナルカ故ニ之ニ賦課シテ同一ノ苦痛ヲ與ヘンニハ其遞加スル所ノ自由所得ニ對シ又遞加スル稅率ヲ以ラスヘシト云フニ在リ故ニ一方ニ於テ限定生計費以下ノ收入アル者ニ對シテ租税ノ賦課ヲ爲スヘカラスト云フハ生計ノ必要費即チ最モ效用大ニシテ其價格モ亦最モ大ナル部分ヲ徵收スルハ非常ナル苦痛ヲ與フルモノニシテ富者ニ對シ累進ノ稅率ヲ賦課スヘシト云フハ結局富者ニ於

ヲハ其奢侈ニ屬スル部分即チ效用及ヒ價額ノ勤キ部分ヲ徴收スルモ爲メニ苦痛ヲ與フルコト比較的尠シト云フニ外ナラサルナリ

第二款 社會政策上ノ積極論

私有財産制度ノ保障ト工業ノ發達及ヒ資本ノ増殖ニ伴フ貧富ノ懸隔ハ益々社會ノ不平均不平等ヲ助長シ漸次政治上經濟上ニ重大ナル害毒ヲ與フルニ至リシハ歐米ニ於ケル最近ノ狀態ニシテ社會問題トシテ近世學說實際共ニ之ヲ調和救済ニ對シテ研究セラルル所ナリトス隨テ社會政策主義ノ一方便トシテ租税ノ賦課徴收ニ付キ國家カ強制シテ富ノ分配ノ調和ヲ圖ラントスルハ「ワグネル」等最近獨逸派ノ一般ニ主張スル所ナリ隨テ此學派ハ先ツ比例税ト累進税ト孰レカ租税ノ原則ニ適合スルト否トヲ問ハス尙ホ其平等ノ賦課ニ加フルニ富者ニ對シテ特ニ比較的重税ヲ賦課スルヲ以テ社會政策ノ主義ニ合致スルモノト爲スモノナリ

第三節 累進税ニ對スル消極論

第一款 經濟上ノ消極論

累進税ハ富ノ蓄積ヲ阻碍シ之カ流出ヲ促スモノナリ貯蓄ノ意思ト貯蓄ヲ爲シ得ルコト即チ餘裕アルコトハ貯蓄ノ二要素ナリ今貯蓄ノ餘裕ヲ侵蝕スルコト甚々ク之ハ貯蓄ヲ爲スヘキ實力ヲ減殺セラルルノミナラス之ニ伴フテ貯蓄心ヲ抑制シ延テ國民ノ勤勉心ヲ減却セシムルニ至ルコト言フ埃タス故ニ貯蓄ニ對スル一種ノ罰金ト觀ルヘキ累進税ハ一方ニ富ノ蓄積心ヲ阻碍シ一方ニハ富ノ流出ヲ助長シ之カ流入ヲ抑制スルモノナリ此危險ハ近時國際間ニ於ケル資本ノ移動激甚ナルニ從ヒ益々甚キヲ加フルニ至レリ

第二款 行政上ノ消極論

奢侈税ハ租税行政上或ハ密賣商ニ因リ通脱セラレ或ハ虛偽ノ申告課税物件ノ隠蔽等ニ因リテ最モ通脱ノ弊害多キモノナリ是レ一ハ其課税物件カ不確定ニ

シテ正確ニ之ヲ調査ヲ爲シ難キト一ハ其税率ノ比較的重キニ歸セスンハアラ
ズ隨テ所得税財產税相續税等ノ如キ最モ課税物件ノ調査ニ困難ナル租税ニ對
シ累進税ヲ課スルカ場合ニ在リテハ一層精密ナル調査ヲ要スルニ拘ラス一方
ニハ課税物件ノ増加ニ伴ヒ税率ヲ増加スルヲ以テ脱税ノ誘引一層強大ニシテ
通脱ノ弊害多ク之ヲ防壓スルコト最モ困難ナリトス

第三款

財政上ノ消極論

累進税ノ收入ハ世人カ豫想スルカ如ク大ナルモノニアラス何トナレハ累進税
ハ比例税ニ比シテ通脱ノ弊害大ナルカ故ニ失フ所ノ損失頗尠キノミナス若
シ此等ノ弊害ノ防壓ニ努ムレハ一方ニハ資本ノ流出ヲ來シテ其收入額ヲ減少
シ一方ニハ徵收費過大ニ失シテ國庫ノ純收入ヲ減少セ又累進税ニ依リテ高キ
税率ニ依リ納付スル税額ハ相對的ニ高額ナルヘキモ納税者其者ノ數少キヲ以
テ絕對的ニ總額ノ上ヨリ見ルトキハ僅ニ最小部分ヲ占ムルニ過キタルヲ以テ
租税收入ノ總額ヲ大ナラシムルニハ多數ノ中等以下ノ階級ニ之ヲ求メスンハ

アラス累進税ノ爲メ特ニ生スヘキ收入力ノ小額ナルハ猶ホ奢侈税ノ收入大
ナラサルニ均シキモノナリ

第四款

道德上ノ消極論

(甲) 累進税ハ專斷的ノモノナリ單ニ立法者ノ臆懼ニ因リテ定メラルルモノダ
ラ近時立憲政治ノ下ニ於テハ立法者ハ多數ノ人民ノ代表者ナルカ故ニ彼等ハ
税率ノ累進ニ因リテ直接ノ利害關係ヲ有セサルノミナス却テ累進税ニ依リ
テ間接ニ自己ノ負擔額ヲ輕減スルコトヲ得ヘシト信スル者ナリ故ニ尤モ多ク
立法者ノ意思ニ因リテ任意ニ決定セラルヘキ累進税率ハ比例税率ノ場合ニ比
シテ專斷ノ弊害大ナルヘキモノナリ

(乙) 累進税率ハ税率ノ累進スルニ從ヒ負税者ノ財源ノ全部ヲ徵收スルニ至ル
ヘシ是レ數理上當然ノ結果ニシテ「ノイマン」累進所得税法ニテハ所得六百バ
ウンドニ對スル税額ハ十五バウンドニ過キサルモ九萬七千バウンドニ對スル
税額ハ四萬九千バウンドヲ超ユヘク又「デロア、ボリネ」ノ累進所得税法ニテ

ハ所得五百フランニ對スル稅額ハ五フランシテ過キサルモ百二萬四千フランニ對スル稅額ハ八十八萬五千フランヲ超ユルニ至リ共ニ一定ノ額ニ至レハ稅額ハ却テ所得額ヲ超過スヘキモノナリ

第四節 累進稅ニ對スル消極論ノ批評

第一 累進稅ニ對スル消極論ノ第一ハ經濟上ノ非難ナリ即チ累進稅ハ富ノ蓄積ヲ防壁シテ之カ流出ヲ促スヘシト云フニ在リ租稅ニシテ稅率重キニ失シ負擔者ノ財源ヲ侵蝕スルニ至レハ國民ノ生産ノ動念ヲ淺却シ富ノ蓄積ヲ阻碍スルニ至ルヘキコトハ既ニ租稅經濟上ノ原則ノ下ニ於テ述ヘタル所ナリ故ニ重稅ト認ムヘキ以上ハ其租稅カ比例稅ニ依ルヤ累進稅ニ依ルヤハ毫モ問フ所ニアラス隨テ消極論者ハ累進稅ヲ以テ直チニ重稅ナルモノト斷言セルモノナリト解釋セズンハアラス然レトモ比例稅ノ稅率其モノニ輕重アル如ク累進稅ニ於テ其稅率ニ輕重アルヘキコト言フ埃タス故ニ本問題ハ富者カ比較的稅率高キモ爲メニ受タル所ノ苦痛ハ同一ノ比例ヲ以テ増加スルモノニアラサルコト

ヲ一言スレハ足レリ是レ第二款第一ニ於テ既ニ詳論セル所ニシテ茲ニ辯明スルノ要ヲ見サルモ尙ホ他ノ方面ヨリ之カ理由ノ一端ヲ證スル所アルヘシ今所得稅ヲ以テ之ヲ例セシニ大所得ヲ得ル者ハ多クハ其所得ハ所有財產ヨリ生スルモノニシテ小所得ヲ得ル者ハ多クハ其所得ハ勞力ヨリ生スルモノナリ財產ヨリ得ル所得ハ其財產ノ存在ト共ニ永久ニ且ツ確實ニ之カ收入ヲ獲得スルコトヲ得ヘキノミナラス財產其モノハ無限ナルヲ以テ其所有額及ヒ收入額モ亦均シク無限ノ伸縮力ヲ有スルモノナリ而シテ一方ニハ全然財產ノ收入以外ニ立チテ自己ノ勞力ニ因リ又特種ノ收入ヲ獲得スルコトヲ得ヘシ故ニ勞力ニ因リテ得ル所得ノ如ク永久ト確實トヲ保シ難ク勞力其モノニ限りアルカ爲メ所得ノ伸縮力少キモノニ比ズルトキハ比較的重キ租稅ヲ負フモ痛痒ヲ感スルコト少キノミナラス財產ノ收入額多キ者ハ徒食爲ス所ナクシテ其收入ヲ増加シ勞力ニ因リテ所得ヲ得ル者ハ日夜勤勉シテ而モ得ル所僅ニ費ス所ヲ支フルニ過キサル者多シトス近時所得稅法ニ於テ此區別ヲ標準ト爲シ所有財產ニ對シテ特ニ負擔ヲ重カラシメ或ハ別ニ財產稅ナルモノヲ所得稅以外ニ設定スル

ニ至ルモ亦此原由ニ外ナラザルナリ。第二 累進稅ニ對スル消極論ノ第二ハ行政上ノ非難ナリ即チ累進稅ハ通脫ノ弊害大ナリト云フニ在リ租稅ニシテ重キニ失スルトキハ通脫ノ弊害ヲ誘導スヘキコト固ヨリ言フ塊タス累進稅ト雖モ其稅率重キニ失セザレハ通脫ノ弊害少カルヘク比例稅モ稅率重キニ失スレハ通脫ノ弊害大ナルヘシ既ニ第一論ノ根據彼レタル以上ハ本論モ亦均シク其立論ノ根據ヲ失フモノナリ均シク課稅物件ノ調査ニ困難ナル所得稅財產稅等ニ在リテハ其通脫ノ弊害ノ大小ハ累進比例ノ區別ニアラスシテ稅率ノ輕重其他租稅行政ノ良否所在人民ノ風俗人情等ニ因リテ主トシテ消長セラルヘキコト言フ塊タサルナリ。第三 累進稅論ニ對スル第三ノ消極論ハ財政上ノ非難ナリ即チ累進稅ハ絕對ニ收入少キノミナラス通脫ノ弊害多キカ故ニ相對ニ收入少シト云フニ在リ本論ハ(一)累進稅ノ問題即チ平等ノ問題ト收入ノ問題トヲ混淆セルモノナリ收入ノ大小ハ租稅ノ種類及ヒ課稅物件ノ多少ト稅率ノ高低トニ正比例スルモノナリ比例稅ト累進稅トヲ比較シテ直チニ一方ノ收入ハ大ナリ一方ノ收入ハ小ナ

リト斷定スルコト惟ハス均シク同一ノ收入額ヲ得ルカ爲メニ之ヲ累進稅比例稅孰レニ依ルモ之ヲ徵收スルコトヲ得ヘシ累進稅ヲ主張スル所以ノモノハ收入ノ多寡ニアラスシテ平等ノ原則ヲ貫カントスルニ在リ收入ノ多寡ハ唯在來ノ稅率ヲ高低スルコトニ因リテ其目的ヲ達スルコトヲ得ヘキナリ(二)反對論者ハ別ノ方面ヨリ累進ノ重稅ヲ避ケ經濟上ノ弊害ヲ免レントセハ累進ノ割合モ之ヲ少クシ其最低ノ率モ之ヲ低クセシムハアラス故ニ一國ノ經濟社會ニ於テ最大多數ヲ占ムル小所得小資本ニ賦課スル稅率輕キニ過キテ其結果豫期ノ收入ヲ得ルニ難シト論スレトモ此等ハ要スルニ反對論者ニ權ヲ假スモノト謂ハスハアラス今所得稅ヲ以テ例スレハ所得稅ニ於テ免稅ト爲スヘキ限定生計費ノ額即チ一方ニハ所得稅ヲ課セラルヘキ最小額所得ニ對スル賦課ノ比率ハ常ニ所得稅算定ノ根據ヲ爲スモノニシテ又容易ニ増減變更ヲ許ササルモノナリ故ニ今三百圓ノ所得ニ對シテ百分ノ一ノ所得稅ヲ課ストモハ其所得稅力減比率ヲ累進ト爲スモ百分ノ一ヲ輕減シテ累進スルコトナク舊ニ依リテ百分ノ一ヲ根據トシテ累進スルヲ原則ト爲スモノナリ蓋シ此場合ニ於テ在來比例稅

ニ依リテ得タル總額ヲ累進税ニ換算シテ最小所得ニ對スル税率ヲ輕減スルノ要ヲ觀ルコトナキヲ以テ累進税ハ其税率ノ差異ニ應スヘキ税額丈ク比例税ノ場合ニ比シテ收入ノ多カルヘキコト言フ候タス故ニ本問題ノ如キハ實ニ根本ニ於テ問題ヲ混淆セルノミナラス累進税ノ却テ比例税ニ比シテ收入大ナルヘキヲ忘却セルモノナリ

第五節 結論

累進税ノ租税ノ原則ニ反セタルコトハ上來述フル所ノ如シ茲ニハ結論トシテ累進税ノ種類性質ニ付テ一言シ尙ホ消極論者ノ非難ノ失當ナル理由ニ付キ言明スル所アルヘシ

累進税ハ別テ甲課税物件ノ累進税乙税率ノ累進税ノ二者ト爲スニ其理由(甲)課税物件ノ累進税 課税物件ノ累進税トハ税率ハ一定シテ變更スルコトナキモ課税物件ヲ假想的ニ累進スル租税ナリ假想的課税物件ノ算定方法ハ主トシテ實在ノ課税物件ニ或實數ヲ乘スルモノ及ヒ或實數ヲ加減スルモノノ二

アリ前者ハ古代「アゼン」現時ノ瑞西ノ一部「カントン」ニ於テ行ハルル方法リシテ各個人ノ所得額ニ對シ或歩合ヲ乘シテ其乘積ヲ以テ所得税ヲ課スヘキ假想ノ課税物件ト爲シ其和乘スル歩合ハ所得ノ大小ニ從ヒテ遞加ノ率ヲ以テ増加スルモノナリ後者ハ「バーデン」「ウルランブルグ」等ニ於テ行ハルル方法ニシテ所得額ノ増減ニ從ヒ特ニ所定ノ額ヲ増減シテ所得税ヲ課課スヘキ假想ノ課税物件ヲ算出スルモノニシテ小額ノ所得ニハ多少ノ數額ヲ減シ所得額ノ巨額ト爲ルニ從ヒテ遞加ノ數額ヲ加フルナリ

(乙) 税率ノ累進税 税率ノ累進税トハ課税物件ノ數額ヲ變更スルコトナク税率ヲ累進スルモノニシテ世人カ普通ニ累進税ト稱スルモノナリ然レトモ其税率及ヒ其課税物件ノ算定方法ニ由リ其間ニ種種ノ別アリ今私見ニ從ヒ所得税ノ場合ヲ想像シテ之カ種別ヲ分類スレハ次ノ如シ

(一) 單純税率累進税 單純税率累進税トハ最低限度トシテ一定ノ所得ニ一定ノ税率ヲ課課シ以上所得ノ増加ニ比例シテ税率ノ増加カ又一一定ノ歩合ヲ以テ累進スルモノナリ先ニ一言セシ「ボチー」氏ノ考案ニ係ル累進税ハ所得額二倍ス

ルニ從ヒテ税率ヲ三倍セルモノニシテ單純税率累進税ノ一種ニ屬スルモノアリ
(二) 複雜税率累進税 複雜税率累進税ハ最低限度トシテ一定ノ所得ニ一定ノ税率ヲ賦課シ以上所得ノ増加ニ應スル税率ノ増加ノ歩合一定セサルモノナリ隨テ其税率ノ歩合増加ノ比率カ遞加スル場合ヲ遞加複雜税率累進税ト稱シ遞減スル場合ヲ遞減複雜税率累進税ト謂フ我現行所得税法ノ如キハ遞減複雜税率累進税ニ屬スルモノニシテ五百圓ノ所得税率ハ千分ノ十二ニシテ其倍額一千圓ノ所得税率ハ千分ノ十五ナルヲ以テ其比率増加ノ歩合ハ四分ノ一ナルモ五萬圓ノ所得税率ハ千分ノ五十ニシテ其倍額十萬圓ノ所得税率ハ五十五ナルカ依ニ比率増加ノ歩合ハ十分ノ一ニ遞減セリ税率ノ複雜累進税ハ各國皆遞減ノ方法ニ依ルヲ例トス是レ第四ノ消極論ニ對スル救済ノ手段ニシテ増加ノ歩合カ遞減スルトキハ或一定ノ限度ニ達スルト其ニ比率ノ増加力停止セラレルモノナリ各國ノ立法例ハ多ク一定ノ額ニ對シテ比率ノ増加力停止シ以テ所謂道徳上ノ非難ヲ避タルコトヲ爲セリ所謂累進税ナルモノ是ナリ

(三) 混同税率累進税 混同税率累進税トハ最低ノ限度トシテ一定ノ所得ニ一定ノ税率ヲ課シ以上所得ノ増加ニ伴ヒ其所ニ増加セル所得額ニ對シテノミ累進セル税率ヲ課スルモノニシテ其税率ノ累進方法ニハ又單純ナル場合ト複雜ナル場合トアルヘシ先ニ一言セルノイマン氏ノ累進税ハ混同税率累進税ニシテ單純税率累進法ヲ採用セルモノナリ即チ氏ノ算定方法ハ百磅以下ノ所得ニ對シテハ之カ課税ヲ免除シ百磅以上千磅以下ノ所得ニ對シテハ其超過額ニ千分ノ三ヲ課シ以上千磅ヲ加フル毎ニ其増加シタル千磅ニ對シテノミ又千分ノ十ヲ増加シタル税率ヲ課スルモノナリ故ニ此方法ハ課税物件ノ階級ノ限界點ニ近キモノニ對スル課税ノ平等ヲ救済シ所謂立法者カ專斷ニ因ル弊害ヲ少クスルコトヲ得ヘキナリ
現行ノ所得税法ハ第三種ノ所得ニ對シ混同税率累進税法ヲ採用セサルカ爲メ比較的ノ平等ノ弊害尠シト爲サス今二箇ノ場合ヲ例證シテ混同累進法ノ租税ノ原則ニ協ヘル所以ヲ明カニスル所アルヘシ

現行所得稅累進稅率 (第三種ノ所得)

三百圓以上 千分ノ十
五百圓以上 千分ノ十二
千圓以上 千分ノ十五
二千圓以上 千分ノ十七
(以下省略)

第一 最低限度ノ所得額ヲ限界ト爲ス場合

甲者 所得額 二百九十九圓
乙者 所得額 三百一圓

現行租税制度ノ税額
甲者 免
乙者 三圓一錢

混同累進法ニ依ル税額
甲者 免
乙者 二錢 (超過額二圓ニ對ス)

所得額二圓ノ差ニ基ク一者税額ノ差額
現行制度 三圓一錢

混同累進法ニ依ル税額

二 錢

第二 税率ノ累進點ノ限界ヲ爲ス場合

甲者 所得額 千九百九十圓
乙者 所得額 二千一圓

現行租税制度ノ税額
甲者 二十九圓九十八錢五厘
乙者 三十四圓一錢七厘

混同累進法ニ依ル税額
甲者 $(249 \times 0) + (200 \times 1) + (500 \times 1.2) + (1000 \times 1.5) = 23$
乙者 $(299 \times 0) + (200 \times 1) + (500 \times 1.2) + (1000 \times 1.5) + (2 \times 1.7) = 23.034$

所得額二圓ノ差ニ基ク二者税額ノ差額
現行制度 四圓三錢二厘
混同累進法 三錢四厘

之ヲ要スルニ消極的ニ於テ最モ有力ナル第四ノ論點ハ所謂累進税遞減税率累

適法混同税率累進法等ニ依リ十分ニ之ヲ弊害ヲ除去シ益、公正ノ原則ニ適合スルコトヲ得ヘシ此他「ボリム」氏ノ如キハ別ニ物品ノ賣買保險ノ掛金貨物運送ノ賃金等カ其一方ノ當事者ノ實力ヲ有スル程度ノ大小ヲ問フコトナク又其額ノ多クナルニ從ヒ其對價ヲ却テ比較的遞減セラルルコトヲ例ト爲シ以テ累進税ヲ非難スト雖モ根本ニ於テ私法上ノ有償行為ト公法上ノ無償行為トヲ混同セル辯論ナルカ故ニ又特ニ茲ニ辯駁スルノ要ヲ見ス又一部ノ折衷論者ハ一國ノ租税負擔ノ狀況ニ照シテ若シ租税ノ負擔カ未タ重カラスシテ國民カ納税ノ餘力ヲ有スルトキ又ハ國民ノ貧富ノ懸隔大ナラサルトキ又ハ間接税重カラスシテ租税ノ負擔カ貧者ニ偏重セサルトキハ特ニ累進税ヲ行フノ要ナシト論セリ然レトモ上述ノ如ク累進税ヲ設定スルノ是非ハ根本ニ於テ租税ノ原則ニ適合スルコトヲ期スルニ在ルカ故ニ他ノ各種ノ政策ト同シテ苟モ其方法ニシテ宜シキヲ得ハ常ニ之ヲ實行スヘク所謂折衷論者カ論スル如ク特ニ一國租税負擔ノ狀況ニ照シテ之カ取捨ヲ爲スヘキモノニアラサルコト言フ埃クサルナ

第五章 租税制度

第一節 緒論

國家又ハ公共團體ハ文化ノ發達ト共ニ其行動ノ範圍益々廣ク且ツ益々複雑ヲ極ム隨テ之カ經常收入ノ増加ニ應スルカ爲メニ或ハ新ニ租税ノ設定ヲ要スヘク或ハ在來ノ租税ニ對シ之カ税率ヲ高ムルコトヲ要スヘシ然レトモ税率ノ高低又自ラ一定ノ限度アリ租税ノ種類又無限ナリト謂フヘカラス之ニ於テ租税ノ負擔重キニ過タルコトナク一般ニ且ツ平等ニ分配セラルル而モ國庫ニ十分ノ收入ヲ得シトスルニハ此等性質機能ノ異ナル各種ノ租税ニ對シテ如何ナル政策ヲ採ルヘキカ是レ租税制度ノ問題トシテ通常單税及ヒ複税論トシテ知ラルル所ナリ然レトモ租税制度ノ問題ハ單税及ヒ複税論ヲ以テ足レリト爲スヘキモノニアラス直接税及ヒ間接税モ其相對的觀察ハ單税及ヒ複税論ニ關聯シテ之カ攷究ヲ要スルノミナラス國税及ヒ地方税モ負擔ノ分配ハ又租税制度ニ關スル重要ナル問題ニ屬セリ直接税及ヒ間接税論ニ付テハ前ニ其絕對的觀察ニ付

キ一言スル所アリシヲ以テ之ヲ略シ茲ニ單稅複稅論及ヒ國稅地方稅論ノ大體ニ付キ述フル所アルヘシ

第二節 單稅及複稅論

第一款 單稅論ノ沿革

收支ノ別明カナラサリシ古代ニ於テハ固ヨリ租稅制度ナルモノナシ第十六世紀以後中央集權ノ興隆ト共ニ國務ノ膨脹ハ租稅ノ雜駁ナル増加ヲ來シ繁雜ナル屬課徵收ノ方法ニ依リテ一般經濟界ノ發達ヲ阻碍スルニ至リシハ先ニ財政學史ノ下ニ於テ一言セル所ノ如シ佛國ニ於テボーダン等ハ當時ノ租稅制度カ納稅力大ナル一部ノ階級ニ對シテ免稅ノ特權ヲ與ヘタル點ト租稅ノ種類多キニ過キ屬課徵收ノ方法繁雜ニ失セラル點ニ付テ論難シ單稅論ハ後者ニ對スル救済手段トシテ一般ニ主張セラルルニ至レリ其後ボーバンア十分ノ一稅論出テ「ロック」「バンダーランド」等ノ土地生産物ニ對スル單稅論出テ次ニ重農學派ノ土地純生産物論ハ土地ノミヲ以テ唯一ノ稅源ト認メ延テ地租ノ單一稅論ヲ唱

フルニ至リ其後不動產ノミニ課稅スヘシト論スル財產單一稅論アリ廣ク固定資本ニ課稅スヘシト爲ス單一稅論アリ租稅ハ常ニ國民ノ所得ヨリ徵收スルモノニシテ其所得ノ何レヨリ來レルハ至モ問フ所ニアラサルカ故ニ國庫ノ需用額ニ應シテ所得單一稅ヲ起スヘシト論スル者アリ然レトモ此等各種單稅論ハ皆難澁ナル複稅論ノ弊害ニ對スル反動ニシテ其理想ニ於テハ固ヨリ不可ナカルヘキモ事實ニ於テ如何ナル種類ノ租稅ヲ以テ單稅ト爲スモ皆租稅公平ノ原則ニ適合スルコト能ハサルカ爲メ延テ財政上經濟上ノ原則ニ反シ論者ノ理想ヲ擊クルコト能ハサルヲ以テ今日ニ於テハ殆ト單稅論ヲ唱フル者ナク單稅問題ハ一變シテ複稅ヲ如何ナル系統ノ下ニ整理スレハ單稅論者ノ非難ニ係ル弊害ヲ除去スヘキヤノ問題ニ移ルニ至レリ

第二款 單稅論ニ對スル非難

單稅論ハ其地租ナルト財產稅ナルト所得稅ナルトヲ論セス根底ニ於テ公正ノ原則ニ反スルモノナリ即チ第一ニ地主又ハ財產ノ所有者ノミニ課稅スル者ナ

ハ以テ租稅一般ノ原則ニ反シ次ニ此等賦課ヲ受ケタル一部ノ納稅者モ各自ハ納稅力ハ各自ノ土地又ハ固定資本ノミニ限ラサルヲ以テ之カ平等ヲ期シ難ク又此等ノ標準ニ依リテ正確ナル賦課徴収ヲ爲スコトハ殆ト不能ト謂ハスンハアラズ蓋シ各種ノ租稅ヲ併用スルトキハ稅率輕キト共ニ一稅ニ於ケル過失ハ重大ニ失スルコトナク又各種ノ租稅ニ依リテ互ニ其過失ヲ補償スルモノナリ故ニ單稅ノ場合ニハ營ニ其過失カ重大ニ失スヘキノミナラス又他ニ之ヲ保證スルノ手段ナキヲ以テ平等ノ原則ニ反スルコト一層大ナルヘシ第二ニ單稅ハ財政ノ原則ニ反スルモノナリ租稅一般ノ原則ニ反スル以上ハ一般ニ普及セラル復稅ノ場合ト同一ノ收入ヲ得ルコトハ單ニ一部ノ階級ニ著シク稅率ヲ高ムルト云フ理由ノミニ據リテ絕對ニ不能ナリト謂フヘカラサルモ現時ノ財政ノ狀態ニ於テハ事實上不能ナリト謂フモ不可ナカルヘシ既ニ稅率ヲ高ムル以上ハ此等ノ租稅ニ依リ一時ニ多額ノ徵收ヲ爲スハ之ヲ種種ノ租稅ニ依リ直接間接ニ徵收セラレタル場合ニ比シテ負擔ノ苦痛ヲ感セシムルコト殊ニ大ナルヘク一部ノ階級ヨリ租稅ニ依リテ國庫ニ十分ナル收入ヲ得ントセバ爲メニ生スヘキ

租稅通脫ノ弊害ハ吾人豫想ノ外ニ在ルヘク爲メニ租稅ノ簡易ヲ目的トスル單稅ハ偶々反對ノ結果ヲ惹起スルニ至ルヘシ第三ニ單稅ハ一部ノ階級ニ對シテ重稅ヲ課スルニ因リ富ノ強制分配ニ對シ著シキ不平均ヲ來シ一部人民ノ稅源ヲ浸蝕シ延テ一般經濟ノ狀態ヲ乱スニ至ルヘキハ前二原則ニ對スル非難ニ伴フ當然ノ結果ナリ

以上ハ租稅ノ原則ニ對スル單稅ノ非難ノ大要ナリ尙ホ茲ニ特ニ一言ヲ要スヘキハ所謂單一稅ト稱セラルルモノハ單ニ形式上ニ於テ單一稅タルニ止マリ事實ニ於テ或程度マテハ舊ニ依リテ複稅タルコト是ナリ例ヘハ一般所得稅ナルモノモ一般消費稅ナルモノモ事實幾種ノ所得稅消費稅ノ相連結セルモノナリ固定資本稅ノ如キモ實際ハ土地礦山家屋器具器械家畜耕作物等ニ課スル租稅ノ結合セルモノナリ隨テ租稅行政ノ簡易ヲ目的トスル單稅論モ或程度マテハ仍ホ事實ニ於テ複稅ナルコトヲ認メスンハアラズ

第三節 國稅及地方稅論

第一款 緒論

地方公共團體ハ往昔主權ノ實力ヲ有シタル獨立ノ團體カ中央集權ノ興隆ニ伴ヒテ漸次其權限ヲ縮小セラレタルト國家カ新ニ行政區畫トシテ設定セラレシトヲ問ハス自己ノ生存ノ目的タル國家ノ事務ヲ處理スル公法上ノ義務ヲ國家ニ對シテ負擔スル國家ノ機關ニシテ獨立ノ人格ヲ有スルモノナリ故ニ其權限内ニ於テハ獨立ノ自由意思ヲ有シ其意思ヲ遂行スルカ爲メ獨立ノ財政ヲ維持スルハ地方團體本然ノ結果ナリ近時自治ノ觀念ノ發達ハ漸次地方行政ヲシテ分權主義ニ進マシムルニ至リ地方財政ハ地方經濟ノ發達ト人口ノ増加ニ因リテ絕對的ニ膨脹スルト共ニ行政事務ノ分配ニ伴ヒテ又相對的ノ増加ヲ爲スニ至レリ我國ノ如キモ地方稅ノ收入ハ年年著ク増加シ明治三十年度ノ決算ニ依レハ府縣稅四千六百〇三萬餘圓市稅三百三十萬餘圓町村稅二千〇三十一萬餘圓合計六千九百六十五萬八千三百三十五圓ニ昇リ三十年現計ノ國稅收入九千四百九十一萬二千八百六十一圓ニ對照スレハ百ニ對スル七十三ノ比率ヲ持スルニ

至レリ

此ノ如ク地方稅ノ問題ハ單ニ其稅額ニ付テノミ尙ホ之ヲ研究スルノ必要アルノミナラス國稅ト相關聯シテ其稅源ノ衝突ヲ調和シ其間ニ如何ニ負擔ヲ分配スヘキヤハ又重要ナル租稅制度問題ニ屬セリ

第一款 附加稅及特別稅

附加稅トハ國稅ニ準據シ稅額ヲ賦課シテ徵收スル租稅ヲ謂ヒ特別稅トハ地方團體カ自己ノ課稅權ノ範圍内ニ於テ獨立ニ賦課徵收スルモノナリ附加稅ニ於テモ單ニ附加スヘキ國稅ノ種類ニ付テノミ制限ヲ加フルモノアリ尙ホ其附加率ノ最高限度ヲ制限スルモノアリ此等ノ附加ニ付テ或ハ中央官廳ノ許可又ハ報告ヲ條件ト爲ス等其間ニ各種ノ體裁ヲ有シ特別稅ニ於テモ其稅目及ヒ稅額ノ全部又ハ一部ニ付キ總テ中央官廳ノ許可ヲ要スルモノアリ或ハ稅目ノ選定稅額ノ決定ニ對シ全ク自由ノ權限ヲ與フルモノアリ其體裁區區ニ別ルルモ要スルニ附加稅ハ國稅ニ準據スル稅率ノ變更ニシテ特別稅ハ新稅ノ設定ナク而

ヲ附加稅ト特別稅ノ範圍限界及ヒ各自ノ賦課徵收ニ對スル權限ノ如何ハ地方稅ニ於テ最モ重要ナル事項ニ屬セリ蓋シ自治團體設立ノ要旨ハ事情ヲ異ニスル總テノ地方ヲ通シテ中央政府ヨリ之カ行政行為ノ全般ニ通シテ確一ナル行政ヲ爲スコト不可ナルト所在ノ人民ヲシテ自ラ公共ノ事務ニ參與セシメ以テ奉公ノ精神ヲ養成シ同時ニ其利害關係ノ密接ナル地方行政ノ發達ヲ期スルニ在リ故ニ同一ノ理論ヲ以テ租稅制度ヲ觀察スレハ中央政府カ國稅ニ依リテ事情ヲ異ニセル地方ノ財政ノ全般ニ通シテ之カ收入ヲ計リ又之カ全般ノ經費ノ支辨ニ充ツルニ租稅公正ノ原則ニ悖ルノミナラス又自治ノ觀念ニ反スルモノト謂ハスシハアラズ然レトモ地方財政ノ監督制限カ重キニ過クルトキハ自治ノ實ヲ失フヘク輕キニ過クルトキハ行政ノ統一ヲ期スルコト能ハサルヘシ故ニ附加稅ト特別稅ノ限界及ヒ此等ノ租稅ニ對スル監督制限ハ重要ナル租稅問題ニ屬スルモノニシテ各國時ト所ニ依リ慎重ナル措置ヲ爲サズシハアルヘカラサルナリ

我國ノ地方稅ノ附加稅ハ地租營業稅及ヒ所得稅ノ三種ニ制限シ各其賦課稅

率ノ最高限度ヲ定メ法律勅令中特別ノ規定又ハ各自其監督官廳ノ許可ヲ要件トシテ制限外ノ租稅ノ賦課最高限度外ノ稅率ノ附加ヲ爲スコトヲ許セリ(府縣制第一三四條市制第一二四條町村制第一二六條特別稅ニ對シテハ府縣稅ハ戶數割營業稅及ヒ雜種稅ノ三種ニ限定シ營業稅ニハ商工業ノ二種雜種稅ニハ十四種ノ課稅物件ノ種目ヲ制限的ニ列舉シ其種目ノ取捨稅額ノ査定等ニ付テハ單ニ中央官廳ニ報告スルヲ以テ足レリトシ尙ホ政府ノ裁可ヲ條件トシテ指定以外ノ特別ノ課稅ヲ爲シ得ルコトト爲セリ地方稅規則營業稅雜種稅規則府縣制第一三三條參照市町村稅ハ市制第九十條町村制第九十條ニ於テ市町村稅トシテ附加シ得ヘキ稅目ハ國稅及ヒ府縣稅ノ附加稅及ヒ直接又ハ間接ノ特別ナルコトヲ規定シ特別稅ニ關スル規定ハ市又ハ町村條例ニ規定スルコトヲ要シ此等ノ條例ノ設定改正特別稅ノ新設增額變更等ハ中央官廳ノ許可ヲ受ケタルコトヲ條件ト爲セリ(市制第一一二條第一一二條町村制第一二五條第一二六條)

第三款 特別稅ノ特質

租税ノ原則ニ反セサル限リハ租税制度ノ單純ヲ期スヘキコト固ヨリ言フ埃タ
ヲ隨テ徒ニ特別税ノ増設ヲ計ルハ租税ノ原則ニ反スルモノナリ然レトモ特別
税其モノノ性質ハ一方ニハ國税本來ノ軫域ヲ侵スコト能ハサルト共ニ一方ニ
ハ國税又ハ特別税ノ軫域ヲ侵スヘカラサルモノナリ是レ地方財政ノ性質ニシ
テ予ハ前者ヲ稱シテ特別税ノ消極的特質ト謂ヒ後者ヲ稱シテ特別税ノ積極的
特質ト謂フ
特別税ノ消極的特質ト稱スルハ特別税ノ範圍カ消極的ノ限界ヲ有スルコトヲ
謂ヒ其原因ハ主トシテ限定セラレタル範圍内ニ限リテ徵收セララルニ原由シ
特別税ノ積極的特質ト稱スルハ其範圍ニ其積極的ノ限界ヲ意味スルコトヲ謂
ヒ其原因ハ主トシテ特別税カ限定セラレタル範圍内ノ經費ニ對シテ支辨セラ
ラルニ原由ス
第一 特別税ノ消極的特質
特別税ノ消極的特質ト稱スルハ其範圍ニ其積極的ノ限界ヲ意味スルコトヲ謂
スコトヲ不便不利ト爲スモノアルハ其賦課徵收ノ地域カ一地方ニ限定セラル

ルニ因リ租税ノ積極及ヒ消極ノ衝突最モ多キニ原因スルモノナリ先ニ國際間
ニ於テ租税ノ負擔カ積極ニ衝突シテ重複スル賦課ヲ受ケ或ハ消極的ニ衝突シ
テ賦課ヲ免ルルコトアルヲ一言シタリ課税物件タル人物又ハ事實ハ國際間ニ
於ケル場合ヨリモ同一ノ國家ノ下ニ於ケル行政區畫相互間ニ於テ尙ホ廣ク尙
ホ多ク衝突スヘキコトハ又言フ埃タサル所ナリ隨テ地方關稅入市税ノ如キ地
方の所得税又ハ財產税ノ如キハ總テ課税ノ重複ヲ來シ易ク徒ニ徵收費多キニ
失シテ純收入少ク却テ地方の經濟ノ發達ヲ阻碍スルコト多カルヘキハ特ニ詳
述ノ要ヲ見サル所ナリ

第二 特別税ノ積極的特質

特別税カ積極的ノ限界ヲ有シテ各種ノ租税中國税ト爲スヘカラサルモノ又ハ
國税ト爲スハ不便不利ト爲スモノアルハ主トシテ其徵收セル收入カ又一地方
ノ經費ニ充テテ支辨セラルルニ原由スルモノナリ國税ハ全國一般ヨリ徵收シ
テ一國全般ノ經費ニ充ツルヲ原則ト爲スカ如ク地方税モ其地方團體地域全般
ヨリ徵收シテ其地域全般ノ經費ニ充ツルヲ原則ト爲スモノナリ然レトモ總テ

ノ社會現象ハ廣キヨリ狹キニ移ルニ隨テ大ヨリ小ニ變スルニ伴ヒ其利害關係カ漸次ニ密接ヲ來スヘキハ自然ノ歟ナルヲ以テ地方稅ニ對スル地方團體員ノ利害關係ハ國稅ニ對スル全國民ノ利害關係ニ比シテ一層密接ナルヘキハ固ヨリ言ヲ換タサル所ナリ故ニ國稅ニ於テ時ニ或ハ限地稅ヲ起シ又ハ所ニ依リテ稅率ヲ異ニスル場合アルカ如ク地方ニ於テモ同一ノ場合ハ國稅ノ場合ニ比シテ多キノミナラス時ニ限地稅ニ依リテ地方ノ限地費ニ充フルコト尠カラサルナリ蓋シ國家ノ自存及ヒ法治ノ目的ニ屬スル行動即チ私人ノ不能ニ屬スル軍事、外交司法ノ如キハ全國一般ニ之ヲ統一ヲ期スヘキモノニシテ全國民カ又之ヲ經費ノ負擔ニ當ルヘキモノ内治ノ目的ニ出ツルモノニ至リテハ其事項ノ經濟的ナルニ隨ヒ物質的ナルニ伴ヒ直接ニ人民ニ對スル利害關係ノ密接ヲ來スモノナルヲ以テ所謂利益交換稅ノ觀念一層強キヲ加ヘ其形式實質ハ漸次手數料ト相近似シ來ルモノナリ今之ヲ我地方制度ニ徵スルモ府縣郡ノ一部ニ對シテ利益アル事件ニ關シテハ內務大臣ノ定ムル所ニ依リ不均一ノ賦課ヲ爲スコトヲ許シ府縣制第一一條郡制第九一條或ハ府縣郡ノ一部ノ地域又ハ一部ノ公共團

體又ハ納稅者ニ對シ夫役及ヒ現品ノ賦課ヲ爲スコトヲ許シ府縣制第一一二條第一三三條郡制第九二條第一一六條或ハ國稅府縣稅ノ附加稅ハ府縣參事會又ハ郡參事會ノ許可ヲ條件トシテ不均一ノ稅率ヲ以テ徵收スルコトヲ許シ市制第一二三條第七號町村制第一二七條第七號或ハ市制第九十九條及ヒ町村制第九十九條ニハ數箇人ニ於テ專ラ使用スル所ノ營造物アルトキハ其修築及ヒ保存ノ費用ハ之ヲ其關係者ニ賦課シ市又ハ町村内ノ一部ニ於テ專ラ使用スル營造物アルトキハ其部内ニ住居シ若クハ滞在シ又ハ土地家屋ヲ所有シ行商以外ノ營業ヲ爲ス者ニ於テ其修築及ヒ保存ノ費用ヲ分擔スヘシ云云ノ規定ノ下ニ於テ特別ノ目的ノ爲メニ徵收スル租稅ヲ認メタリ是レ先ニ手數料ノ觀念ヲ述フルニ際シ一言シタル負擔稅ナルモノニシテ最モ特別稅ノ特質ヲ示セルモノナリトス

今參考ノ爲メ特別稅及ヒ附加稅ニ付キ明治三十年度決算表ヲ左ニ掲クヘシ

〇三十年決算

府縣稅

財政學

收入論 無償收入 租稅制度 國稅及地方稅論

特別税	一〇七〇・一〇二〇
附加税	一四〇三・九五五七
市税	
特別税	二一九七七・四〇
内譯	
市特別税	三一七六一・四
府縣特別税ノ附加税	一八八〇・一二六
附加税	一一〇五八・八〇
町村税	
特別税	一二七三二・〇四五
内譯	
町村特別税	五四八六・二〇
現品夫役	三八〇〇・九〇
府縣特別税ノ附加税	一一八〇・三三三五

附加税

七五八三・二八〇

第六章 租税ノ負擔

第一節 負擔ノ免除ト消滅

租税ノ負擔ハ租税問題ノ根底ヲ成スモノニシテ租税負擔ノ所在カ決定ナルルニアラスンハ所謂納税力ニ應ジテ賦課徴收スヘシト云フ租税根本ノ觀念ヲ明カニスルコトヲ得ス租税ノ負擔問題ニ付テ第一ニ注意スヘキハ均シク納税力ヲ有スル者ニシテ負擔ヲ免レ又ハ負擔ノ免除ヲ受クル者ト負擔ヲ受ケテ負擔其モノヲ消滅スル者トノ別アルコト是ナリ負擔ノ免除ニハ事實上又ハ法律上免税ノ特權ニ依リテ他働的ニ負擔ヲ免除セラルル者アリ或ハ詐欺ノ申告財産ノ隱蔽密賣等ノ不法手段ニ依リテ自働的ニ負擔ヲ免ルル者アリ免除ノ場合ハ消滅ノ場合ト同シク納税力ヲ有スル者ハ負擔ノ全部又ハ一部ニ對シテ苦痛ヲ感セサル者ナレトモ課税者ヨリ觀察スルトキハ負擔ヲ課セス又課スルコト能ハサルモノナルカ故ニ租税一般ノ原則及ヒ平等ノ原則ニ背反スルモノニシテ

立法及ヒ行政ノ改善ニ依リテ之カ救済ヲ計ラズンハアルヘカラス之ニ反シテ負擔ノ消滅ハ負税者カ負擔ヲ課セラレ自己カ適法ノ行爲ニ因リテ其負擔ノ若痛ヲ除却スルモノナルカ故ニ少タトモ其消滅ニ歸セシ負擔額丈新ニ國民ノ納税力ニ餘地ヲ生セルモノト謂ハスンハアラス然レトモ負擔ノ消滅ニハ其生産費ノ節略ニ依ル場合ト其生産資財ノ品質ヲ下シ又ハ數量ヲ減スルニ依ル場合ノ別アリ後者ハ固ヨリ望ムヘキモノニアラステ前者ニ因ル負擔ノ消滅換言スレハ生産力ノ改良發達ニ基ク負擔ノ消滅ハ最モ財政上又ハ經濟上ニ於テ喜フヘキ現象ナルハ言ヲ埃タサル所ナリ

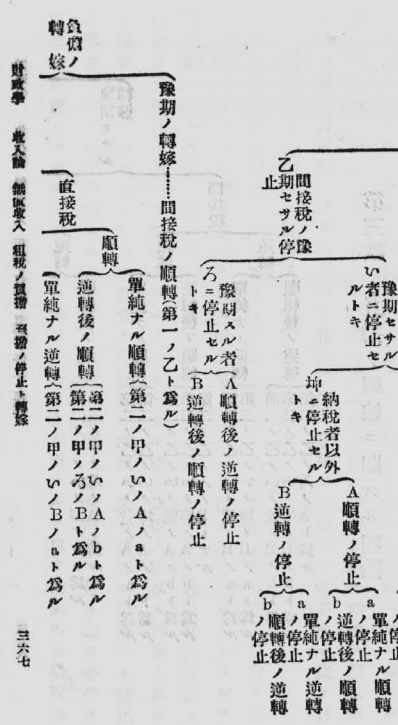
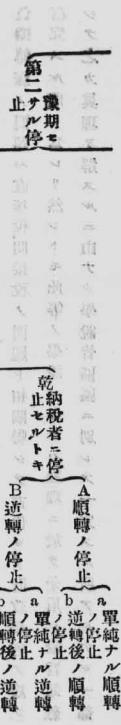
第二節 負擔ノ停止ト轉嫁

租税ノ負擔カ歸著セル場合ヲ稱シテ負擔ノ停止ト謂ヒ負擔カ二人以上ノ間ニ移轉スル行動ヲ稱シテ負擔ノ轉嫁ト謂フ負擔ノ轉嫁カ漸次序ヲ逐テ廣ク輾轉スル場合ヲ稱シテ負擔ノ波及ト謂ヒ負擔ノ一部カ停止シ一部カ轉嫁スル場合ヲ負擔ノ分擔ト謂フ租税負擔ノ停止ニハ豫期ノ停止ト豫期セサル停止トノ別

アリ豫期ノ停止トハ立法者カ豫期シタル方法ニ依リ豫期シタル負税者ノ許ニ負擔ノ歸著シタル場合ヲ謂ヒ豫期セサル停止トハ豫期セサル被税者ノ許ニ負擔ノ停止シタル場合又ハ豫期セサル方法ニ依リテ豫期シタル負税者ノ許ニ負擔ノ停止シタル場合ヲ謂フ

負擔ノ轉嫁ニハ前轉及ヒ後轉ノ二種アリ負擔ノ前轉トハ納税者ヨリ順次後者ニ負擔ヲ移轉スルモノニシテ租税カ供給者ヨリ需要者ニ生産者ヨリ販賣者ニ販賣者ヨリ消費者ニ企業家ヨリ其得意先又ハ勞力者ニ移轉セラルル場合ノ如キヲ總稱スルモノニシテ又負擔ノ順轉ト謂フ負擔ノ後轉トハ前轉ト反對ノ方向ニ負擔ヲ移轉スルモノニシテ又負擔ノ逆轉ト謂フ租税ノ轉嫁ニハ又豫期ノ轉嫁ト豫期セサル轉嫁ノ別アリ立法者カ豫期シタル方法ニ依リ豫期シタル負税者ノ許ニ轉嫁スル場合ヲ豫期ノ轉嫁ト謂ヒ立法者カ豫期セサル被税者ニ轉嫁スル場合又ハ豫期セサル方法ニ依リテ豫期セル負税者ノ下ニ轉嫁スル場合ヲ豫期セサル轉嫁ト謂フ

ル所タリ予ハ其名稱ノ是非ハ之ヲ第二トシ少クモ負擔ノ所在及ヒ歸著ハ頗ル複雑ナルモノナルカ故ニ上述ノ定義ニ依リ之カ圖解ヲ示セハ大凡次ノ如シ





第三款 負擔ノ轉嫁ニ關スル理論

負擔轉嫁ノ問題ハ直接稅間接稅ノ問題ト相關聯シテ古代ヨリ財政學者ノ廣ク研究スル所ト爲レリ然レトモ此等ノ學說ハ多クハ論理ニ於テ矛盾シ論旨錯雜シテ之カ眞理ヲ解スルニ由ナク學說皆區區ニ別レテ一定スル所アルナク一部

ノ學者ノ如キハ租稅平等波及論ヲ唱ヘ租稅ハ貸財ノ移轉ニ伴ヒ漸次取引者全體ニ波及スヘキヲ以テ租稅ノ負擔ハ一定ノ時期ヲ經ルト共ニ全社會ニ平等ニ分擔セラルヘシ換言スレハ租稅ハ各個人其苦痛ヲ免レントスル競争ノ結果適ニ眞正ノ負擔者ヲ求メテ租稅自然ノ公平ナル歸着ヲ爲スニ至ルヘシト論スル者アリ此等ノ波及論者ヲ首トシ重農學派以後ノ財政學者カ或ハ地主ニ歸着スト曰ヒ或ハ資本家ニ歸着スト曰ヒ其他種種ノ意見ヲ主張スル者多キモ總テ負擔ノ問題ニ付テ幾多ノ誤謬ヲ爲ササルモノ尠シ

負擔ノ轉嫁ニハ絕對ナル轉嫁ナシ甲カ今百圓ノ負擔ヲ受ケ其百圓ノ負擔ヲ乙ニ轉嫁スルニハ期間ノ經過ヲ要ス隨テ單ニ百圓ノ負擔カ乙ニ轉セラレタルヲ以テ甲ハ全ク負擔ヲ免レタリト謂フコトヲ得ス甲ハ少クトモ其期間内百圓ニ相當スル利息ノ損失ヲ負擔セルモノナレハナリ故ニ負擔ノ轉嫁カ複雜ト爲ルニ隨ヒ時期ノ經過スルト共ニ負擔ノ種類及ヒ總額カ又ハ同時ニ錯雜ナル變化ヲ來スヘキコトヲ記憶セシムハアラス茲ニ租稅ノ負擔問題ニ付キ之ヲ各種ノ租稅ニ照應シテ研究スルコトハ時日ノ許ササル所ナルヲ以テ抽象的ニ租稅全

第二 富者カ貧者ニ勝チ智者カ愚者ヲ制スルハ社會ノ現象ニ通スルノ原則ナリ隨テ立法者カ地主家屋所有者資本家營業家等ニ直接ニ之カ負擔ノ停止ヲ豫期シ又理論上他ニ轉嫁スヘカラスト爲ス地租家屋稅資本稅營業稅等カ事實小作人傭家人勞働者得意先ノ多數ノ弱者ニ轉嫁セラルルハ一般ニ認メラルル所ニシテ近時社會政策カ財政問題ニ於テ勢力ヲ有スルニ至リタル一ノ原因ナリトス

第四編 收支適合論

第一章 總論

第一節 收支ノ不適合

第一款 緒論

財政ノ要ハ出ルヲ計リテ入ルヲ制スルニ在リ隨テ財政ノ整理ニハ收入ト支出ト相平均シテ其間ニ過不及ナキコトヲ要ス故ニ收支ノ適合ヲ期シ財政ノ權衡

ヲ保持セシムル當局者ハ一定ノ時期ヲ畫シテ會計期ト爲シ其期間内ノ財政計畫ヲ立テ收入支出ノ種類及ヒ數額ヲ彙類區分シテ收支ノ平均ヲ保持スルニ必要ナル基礎ヲ確定スルコトヲ要ス此財政計畫ハ通常豫算ノ編成トシテ現ハルルモノニシテ通常會計期間ヲ一箇年トシテ會計年度ト稱シ收入支出モ亦豫算出歲入ト稱セラル

然レトモ複雜ナル國家ノ行政ハ將來ニ於ケル客觀的事情ノ變遷ニ伴ヒ固ヨリ單純ナル理想ヲ以テ之ヲ律スヘカラス隨テ豫算ハ所期スルカ如ク收支ノ權衡ヲ正確ニ保持シ難ク或ハ歲計ニ剩餘ヲ生シ或ハ不足ヲ告タルコトヲ免レス此豫算ヲ少カラシメントスル積極的方法ハ豫算ノ編成ニシテ豫計論ニ屬シ其發生シタル豫算ヲ調和シ之ヲ救正スヘキ消極的方法ヲ研究スルハ收支適合論ノ目的ニシテ或ハ財政權衡論ト曰ヒ或ハ其救正方法ノ基礎ヨリ觀察シテ國家信用論ト曰ヒ或ハ其重ナル救正方法ノ名稱ヲ借リテ國債論ト稱ス然レトモ後ノ二者ハ其範圍ニ於テハ固ヨリ收支適合論ノ一部ニ屬スヘキコト言フ族タサルナリ

私人經濟ニ於テハ其收入ノ種類多クハ單一ニシテ其數額モ亦一定セルモノ多キヲミナラズ其一定ノ收入額ヲ限度トシテ便宜支出額ヲ比較的の自由ニ斟酌シ得ヘキモノナルヲ以テ豫算ノ範圍ヲ來タスコト少カルヘキモ公共經濟ニ於テハ其收入ノ種類複雑ニシテ官有財產ノ收入官業ノ收入手數料及ヒ租稅中稅表ニ依ル租稅收入主トシテ間接稅ノ收入ハ皆社會現象ノ變化ニ伴ヒテ増減シ財政家ニ於テ左右シ得ヘキ定額ノ收入ハ殆ト臺帳ニ依ル租稅收入(主トシテ直接稅ノ收入)ノ一部ニ限ラレ入頭稅地租等ノ類ニシテ所得稅等ニ至リテハ其收入額ヲ豫定スルコト難シ一方ニハ歲出ノ各款項ハ收入額ヲ限度トシテ自由ノ斟酌ヲ許スコト無ク常ニ歲出ノ臨時増加ヲ要スヘキヲ以テ公共經濟ニ於テ豫算ト決算ト不適合ヲ來タスヘキハ其本然ノ性質ニ屬スルモノナリトス

第二款 剩餘ヲ生スル場合

會計ニ剩餘ヲ生セル場合ハ管ニ事實トシテ稀ニ生スルモノナルノミナラス此

カ救正ノ方法モ又甚タ容易ナルモノナリトス若シ其剩餘ニシテ比較的ノ久馬性質ヲ有スルトキハ或ハ租稅中比較的の惡稅ト認ムヘキモノヲ廢シ又ハ重稅ノ稅率ヲ低減シ經常ノ收入ヲ減少シテ民力ノ休養ヲ計ルヘク若シ其剩餘ニシテ一時ノ性質ヲ有スルトキハ其額ノ多少ニ應ジテ或ハ公債ノ償還民有財產ノ買上官業ノ設備擴張等臨時ノ積極又ハ消極ノ支途ニ充ツルコトヲ得ヘシ

公共經濟ニ於ケル歲計ノ不足ハ又一方ニ於テハ或程度迄ハ豫算ノ編成ニ際シ歲出ヲ高ク見積リ歲入ヲ過大ニ爲スコトニ依リ之ヲ避クルコトヲ得ヘシ隨テ不足財政策ト剩餘財政策ト何レカ理論實際ニ協ヘルヤハ又財政上ノ一問題ナリ然レトモ財政ノ要ハ收支ノ適合ニ在リテ剩餘多キニ過クルハ不足多キニ過クルト同一ノ非難ヲ免レサルハ財政學總論ニ於ケル財政ノ特質ニ於テ既ニ論述セル所ナリ而シテ不足ノ臨時ノ支出ニ基ク場合ハ毫モ財政上ノ咎ムヘカラサルニ反シ剩餘ノ多キニ失スル場合ハ少クトモ財政調理ニ對スル非議ヲ免ルルコト克ハナルヘシ

アタムタ氏ハ左ノ三點ヲ以テ剩餘財政策ヲ絶對ニ非認セリ

第一、歳計ノ不足ハ國民ヲシテ憲法上有スル財政監督ノ大權ノ行使ヲ慎重ナラシメ歳入ノ剩餘ハ財政ノ監督ヲ忽ニシ年過大ノ支出ヲ來タスニ至ルハ千八百六十年以降千八百八十二年ニ至ル合衆國ノ財政史ニ徴セテ明カナル處ナリ

第二、歳計ノ不足ハ議會ヲシテ該年度ノ支出豫算ヲ再ヒ審査檢閲セシメ延テ翌年度ノ豫算ノ議定ニ慎重ナル注意ヲ與フルニ至ラザルモノナリ

第三、歳計ノ剩餘ハ民間ニ於ケル通貨ノ流通額ヲ減少シ産業社會ヲ動搖セシムルノ憂アリ但シ其剩餘ヲ公債ノ償還ニ充ツルトキハ市價ニ影響ヲ及ボスコト少カルヘキモ若シ公債ノ償還ニ充ツルコト無キトキハ通貨ノ減少總令久シキニ亘ラサルモ起業家ハ通貨減少ノ影響未タ一般ノ市價ニ及ハサルニ先チ已ニ之ニ依リテ生スル弊害ヲ感スルニ至ルヘ

第三款 不足ヲ生スル場合

歳計ニ不足ヲ生スル場合ハ事實トシテ最も生シ易ク且ツ此カ救正ノ方法又困難ニシテ財政上最も重要ナル事項ニ屬シ其不足額巨大ナルトキハ其措置ノ如何ハ財政ノ紊亂ヲ來シテ幾年ノ累ヲ醸成シ甚シキハ一國ノ生存ヲ危クスルニ至ルコト古來其例乏シト爲サズ今不足ヲ生スル場合ヲ其性質ヨリ分類スレバ之ヲ次ノ二者ニ分ツコトヲ得ヘシ

第一 金庫上之不足

第二 真正之不足

第一 金庫上之不足トハ單ニ金庫ノ上ニ於テ或時期ヲ限リ不足ヲ來スモノニシテ會計年度ノ末ニ於テハ結局違算ヲ生スルコトナキモ一時收支ノ時期又ハ數額カ豫期スル所ニ違フヨリ生スル一時ノ不足ナリ即チ一會計年度内ニ於テ甲收入ノ時期カ豫定ノ時期ヨリ遅ルルカ乙支出ノ時期カ豫定ノ時期ヨリ早キカ丙豫定ノ時期ニ於ケル收入額カ豫定額ヨリ少キカ丁豫定ノ時期ニ於ケル

支出額カ穩定額ヨリ多キニ基因スルモノニシテ此場合ハ所謂表面上ノ不足又ハ假面上ノ不足ト稱セラレルモノニシテ我國ノ租稅收入ニ於テハ一定ノ時期ヲ限ラスシテ時時ノ收入アル間接稅ヲ以テ歲入ノ大部分ヲ占ムル英國等ト異ナリ政府收入ノ過半ハ直接稅ニ依ルヲ以テ收入ノ時期一定シ金庫上ノ不足ヲ生スル場合比較的少シ而シテ此カ救正策トシテ租稅ノ納期ヲ改正シテ此カ不足ヲ生セテラシメント難キニ屬スルヲ以テ納期ハ被稅者ト課稅物件ノ關係及ヒ性質ヨリ財務行政上容易ニ變更ヲ許スヘキモノニ非サルノミナラス一方ニ納期ヲ改正スルトモ支出ノ時期又豫定スヘカラサルモノ多クレハナリ政府ハ其信用ヲ利用シテ一時資本ヲ借入ルヲ常トシ其多クハ中央銀行ノ力ヲ借ルモノニシテ短期ノ借入又ハ大藏省證券ノ發行等ニ依リテ之カ一時ノ不適合ヲ救正スルヲ例トス其大藏省カ責ヲ負フテ國家ノ信用ヲ利用シ未タ政府全體ニ關係ヲ有セサル點ニ於テ學者或ハ財政信用又ハ財政上ノ公債ト曰ヒ又財政官衙カ政府ノ費用ノ融通ヲ營ムモノト觀テ營業的信用又ハ營業的公債ト稱スルコトアリ其細論ニ至リテハ別ニ國債分類ノ章ニ於テ述フル所アルヘシ

第二 真正之不足トハ一會計年度ニ於テ收入ノ支出ヲ充タスルニ足ラサル場合ニシテ或ハ收入額カ豫期ニ合スルモ支出額豫定額ヨリ多キニ過クルカ爲メ之カ不足ヲ來シ或ハ支出額豫期ニ合スルモ收入額豫定額ヨリ少キニ過クルカ爲メ之カ不足ヲ來スモノニシテ事實ニ於テ前者ハ最も多ク發生シ其不足額又著シク巨額ニ上ルヲ例トナスモノナリ而シテ其支出超過ヲ來ス重ナル理由ハ戰亂天災等ノ緊急ナル事變ト政治經濟上ノ起業トノ二種ニシテ前者ノ不足ヲ充タス爲メ起債スル公債ハ通常消費公債ト稱シ後者ノ不足ヲ充タス爲メ起債スル公債ハ通常起業公債ト稱セラル

學者又別ニ經濟上之不足ナルモノヲ舉クル者アリ所謂經濟上ノ不足トハ政府カ經營スル所ノ有形無形ノ生産ハ國民カ支出スル所ノ經濟上ノ價值ニ比シテ及ハサルヲ謂ヒ結局政府カ國民ニ賦課セル額ニ比シテ其效果ノ小ナルヲ指スモノナリ故ニ一方ニハ國家ハ苛重ノ負擔ヲ課シテ一方ニハ其收入ヲ不生産的ニ支出スルトキハ違ニ民力ノ疲弊ヲ來シ真正ノ不足又ハ之ニ伴フニ至ルヘシト言フニ在リ私見ヲ以テスレハ經濟上ノ不足トハ政府ノ經費ノ

生産のナルヤ不生産のナルヤト云フコトヲ半面ヨリ觀タル結果ニシテ唯ハ結果ヨリハ原因ヨリ觀タルモノナリ故ニ理論上不生産の經費ハ總令收入ノ支出ニ超過スルモ結局經濟上ノ不足ヲ生セリト謂フコトヲ妨ケサルト共ニ生産の經費ハ總令支出ノ收入ニ超過スルアルモ結局經濟上ノ不足ヲ生セリト謂フコトヲ得サルナリ要之此用語ハ學科ノ上ヨリ觀ルモ必要少キト共ニ事實ニ於テハ此カ有無程度ノ如何ハ之ヲ付度スルニ由ナキモノナルヲ以テ此ニ之ヲ認メス

真正之不足ニ對スル救正ノ方法ハ金庫上ノ不足ノ場合ニ比シ著シク困難ナルモノニシテ其不足カ恒久ノ性質ヲ有スルモノナルトキハ此ヲ填補スルニ臨時ノ收入ヲ以テシ苟且偷安一時ヲ揀抹スルカ如キハ財政學ノ原則ニ違反スルモノニシテ益財政ノ紊亂ヲ助長シ遂ニ收拾スルコト能ハサルニ至ルモノナリ故ニ此カ救正方法トシテ消極的ニハ成ルヘク經常支出ノ節約ヲ行ヒテ民力ノ充實ヲ計リ積極的ニハ其不足ノ經費ヲ支辨スルカ爲メ私人經濟的收入トシテハ官有財産又ハ官業ノ改良擴張ヲ計リ公共經濟的收入トシテハ手數料租稅ノ

改正ヲ期スル等又經常收入ノ増加ニ依ラヌシハアラニ而シテ理論ニ於テモ亦實際ニ於テモ主トシテ取ルヘキ方法ハ新稅ヲ起スカ又ハ在來ノ租稅ノ稅率ヲ高ムルニ存シ隨テ此等ノ問題ハ租稅政策ノ範圍ニ屬スルヲ常ト爲スモノナリ一時限リノ支出ニ屬スヘキモノニシテ而モ何レノ會計年度ニ通スルモ規則正シク或種類ノ行政事務ニ附帶シテ其年要スヘキ經費モ大體ニ於テ之ヲ豫算ニ見積ルコトヲ得而モ其額ノ少額ニ止マルモノアリ例ヘハ公用家屋道路等公有物ノ設備修繕ニ要スル經費ノ如シ此等ハ箇箇獨立ニ觀レハ又一時限リノ經費ト觀ルコトヲ得ヘキモ財政上此ヲ經常不足ト觀ルヲ正當ト爲スモノナリ

真正之不足ニシテ一時ノ性質ヲ有スルモノ即チ臨時ノ不足ト稱セラルモノハ交通機關ノ設備軍備ノ擴張編制其他司法行政立法等ノ大改革等ニ伴ヒテ發生スルコト多ク殊ニ天變地異交戰擾亂等絕對ニ豫期スヘカラサル支出ニシテ之ニ要スヘキ經費ノ支辨ニ時日ノ餘裕ヲ許ササルモノアリ此等ノ場合ニ在リテハ分捕品賦納金又ハ剩餘金ノ繰出ニ依ルカ如キハ悉ク偶然姑息ノ策ニシテ

此カ救正ノ方法トシテ認ムヘキモノハ要スルニ次ノ四種ヲルニ過キズ

- 第一 官有財産ノ拂下
- 第二 非常準備法
- 第三 租税ノ新設又ハ税率ノ増加
- 第四 公債ノ借入又ハ募集

第二節 臨時ノ不足ニ對スル救正方法

第一款 官有財産ノ拂下

官有財産ノ重ナルモノハ田地ト森林ナリ而シテ田地ハ其經營ノ方法カ直接管理法タルト委任管理法タルト將タ小作法タルトヲ問ハス現時一般ニ政府ノ經營ヲ以テ不得策ト爲スヲ通説ト爲シ又一方ニハ森林ハ治水其他ノ理由ヨリ彼ノ保安林ノ如キ政府ノ手ニ買收シテ猶ホ此カ經營ノ術ニ當ルヘキモノアルコトハ官有財産ノ章ニ於テ詳論セル所ナリ隨テ現時一般ニ非常ノ支出ヲ辨スルニ足ルヘキ財産無キカ爲メ絕對ニ不能ナルヲ常ト爲シ縱令事實此等ノ財産

剩アリトスルモ田地森林ノ類ハ此カ移轉融通ニ不便ナルヲ以テ一方ニハ巨額ノ賣ヲ投シテ此ヲ購入スル者甚タ稀ナルヘク一方ニハ其財産ノ巨多ニシテ且ツ拂下ノ必要大ナルカ爲メ其拂下價格ハ必ス相當代價ヲ下ルコト著シカルヘク加フルニ事實急速ノ需要ニ應スルニ難キヲ以テ又相對ニ不能ナルモノナリトス故ニ非常費支辨ノ方法トシテ理論上主張スル者無ク又現時實際ニ此方法ヲ取ル者ナキニ至レリ

第二款 非常準備法

非常準備法トハ居常金銀其他ノ貨幣ヲ蓄積シテ一朝非常ノ需要アルニ際シ之ニ應スルノ準備法ニシテ信用經濟ノ行ハレサリシ時代國家觀念ノ未タ發達セサリシ時代換言スレハ租税ノ徵收公債ノ募集ノ如キ仍ホ充分ニ行ハレサリシ時代ニ在リテハ一朝有事ノ際非常準備法ノ設備ナキニ於テハ他ニ之ニ應スヘキ政策存セザリシヲ以テ其體様ニ於テハ時ト處ニ由リ多少其趣ヲ異ニスルアルモ何レモ皆斯法ノ精神ヲ取ラサルモノ無カリシモノノ如シ

按スルニ希臘時代ニ在リテハ亞典政府ハ波斯戰爭紀元前四百九十年トペロ
ボキナス戰爭(紀元前四百四十六年)トノ間ニ一萬「タレント」(「タレント」ハ凡
ソ一千一百八十圓餘ニ當ル)ヲ貯蓄シ波斯ニ於テモシラス大王以後鉅萬ノ軍
用金ヲ蓄積シ歷山大王波斯征討ノ際之ヲ略取シ爾後マセドニア帝國ノ準備
金ノ殘部ハ又羅馬ノ將軍ボローロス・エミリオスノ略取スル所ト爲レリ又羅馬
時代ニ在リテハ「オウルム」・ウイセシマリウムト稱シ奴隸ノ身受金ニ五分稅ヲ
課シ其收入ハ屬邦ヨリ納ムル資金敵國ノ分捕品等ト併セテ「ナトルン」殿堂
ニ蓄積シタリ其後「オーグスツス」・「タイベリアス」・「ウエスパシアン」ノ諸帝又非常
準備金ヲ貯蓄シタリ佛國ニ在リテモ「フランク」時代ミツタル「アルタル」通シ
歷代ノ諸王非常準備金ヲ貯蓄シ普魯西ニ在リテハ「フリードリッヒ」二世ノ朝ニハ舉ケテ此
ノ萬盡セシモ爾後此ヨリ巨額ノ準備ヲ見ルニ至レリ歷史家ノ說ニ據レハ六
千乃至七千萬「タール」ニ上リタリシト云ヘリ東洋ニ在リテハ支那ハ歷代興
亡盛衰常ナカリシト共ニ常ニ非常準備法ノ存セシハ史乘ノ證スル所ナリ我

邦ニ在リテモ古代貨物經濟時代ニ在リテハ政府ハ各種ノ官有財産ヲ以テ非
常準備ニ充テ又大寶令ノ頒ニハ別ニ義倉ノ制アリ一位以下百姓ニ至ルマ
至上上戸ハ二石上ノ中戸ハ一石六斗等以下其間ヲ九等ニ「ト粟」又ハ其他ノ穀
類ヲ田租ト共ニ納メシメ貯藏シテ凶歉ノ患ニ備ヘシメタリ其費途ノ一定シ
テ救恤行政ニ關聯スルモノナレトモ又非常準備法ノ精神ヲ取リシモノナリ
降リテ豐臣秀吉カ臣額ノ金塊ヲ大坂城内ニ貯藏セシカ如キ徳川家康カ金法
馬ト稱スル分銅形ノ金塊ヲ造リ一代毎ニ一箇宛後世ニ遺サシムルコトヲ遺
訓セシカ如キ又非常準備法ヲ執レルモノト謂フヘキナリ
然レトモ方今信用經濟ノ發達セル經濟界ニ在リテハ資本ノ融通ノ便益又古代
ノ比ニ非ナルヲ以テ殆ト非常準備法ヲ取ルノ必要ナク各國又此制ヲ採用スル
處ナシ唯歐洲ニ在リテハ普魯西及ヒ丁抹ニ於テ猶ホ斯法ノ存スル在リ即チ普
魯西ニ在リテハ「フリードリッヒ」・「ウキル」ヘルムニ以後歷代ノ君主巨額ノ準備ヲ貯
蓄シ一千八百七十年ノ役佛國ト戰フテ巨額ノ償金ヲ得ルヤ其五十億「フラン」
内一億五千萬「フラン」割キテ此準備金ニ繰込ミ一千八百七十六年ノ統計ニ據

レハ其總額一億一千一百萬弗ニ達シ而モ其内譯一千六百萬弗ハ外國ノ有價證券ヲ以テシ六千五百萬弗ハ自國ノ鐵道公債ヲ以テシ眞ニ非常準備ノ目的ヲ達シ得ヘキモノ即チ正金トシテ保存スル額ハ三千萬弗ニ過キスト云フ昨春予ノ記憶スル所ニ據レハ我政府モ日清戰爭ノ殘額中費途ノ確定セサルモノ七千五百萬圓ヲ非常準備金トシ平時ハ以テ軍艦補充教育救恤等國費ノ一部ニ供シ一朝事變アレハ以テ戰爭準備金ニ充テシモノ如シ隨テ本論ハ既ニ學說實際共ニ消極說ニ一致セルモ茲ニ少シク論述スル所アルヘシ

非常準備法ニ對スル消極說ノ大要ヲ述ブレハ第一政治上ヨリ觀察スレバ常ニ施政者ノ專斷放恣ヲ誘導シ濫用浪費ノ弊ニ陷リ易ク非常ノ支出ヲ填補スルニ足ルヘキ準備金ノ存在ハ一方ニハ不急ノ事業ヲ起シ又ハ無謀ノ戰端ヲ開ク等不生產業ニ費消スルノ機會ヲ與フルコト多キハ昔魯西其他ノ歷史ニ於テ證明スル所ニシテ國家ノ行政機關ヲ巨額ノ資金ヲ所有セシムルニ依リ政府ヲシテ國民ヨリ獨立セシメ國民ノ監督最モ必要ナル時機ニ於テ監督ノ效果ヲ減失セシムルモノナリトス第二財政上ヨリ觀察スレバ非常準備金ノ本旨ハ非

常ノ支出アルニ際シ直チニ此ヲ填補スルニ在ルヲ以テ正貨トシテ存スルニ非スシハ特ニ斯法ヲ設ケテ精神ヲ遠スルコト克ハス故ニ收益ヲ計リテ此ヲ市場ニ投下スレバ一朝有事ノ際之ヲ政府ノ手ニ回收スルニ由ナク又有價證券トシテ存スレバ必要ノ場合ニハ又此ヲ市場ニ買却セスシハアラス隨テ其價格ノ低落スルハ固ヨリ其手數煩勞時間ヲ浪費シテ徒ラニ經濟市場ヲ擾亂シ而モ斯法設定ノ目的ヲ達スル克ハサルモノトス若シ正貨トシテ倉庫ノ裡ニ貯藏セラレシカ徒ラニ活物ヲ死物ト爲スノ愚ヲ學ヒテ一方ニハ巨額ノ流動資本ヲ吸收スル結果トシテ金融ヲ逼迫シ產業ノ發達ヲ阻碍スル場合モ亦少カラサルヘシ

日耳曼ハ五年間ニ七億六千「フランク」ヲ不生產業ニ浪費セリ一方ニ巨額ノ有價證券ノ買收ハ其後ノ賣出ニ因リテ其下落ヲ屢シ物價ノ騰貴ヲ來セ又商業ノ紊亂ヲ來セリ若シ日耳曼政府カ正金ノ受取額ヲ戰爭費用ヲ償フヲ限度トシ其他ハ佛國ノ公債證書ヲ以テスレハ日耳曼ハ爲メニ市場ヲ擾亂スルコトナクシテ永ク敵國ノ膏血ヲ絞リ佛國モ亦爲メニ財政整理ノ反動力ヲ挫折セ

佛ハ昔ニ勝チタリ云云ボリニ氏財政學卷一第二章非常準備金ノ一節ニ
第三經濟上ヨリ觀察スレハ産業ノ進歩國力ノ増進ニ必要ナル資本ノ一部ヲ政
府ノ手ニ吸收スルニヨリ經濟自然ノ發達ヲ阻碍シ物價ノ騰貴金融ノ逼迫ヲ來
スノ通弊ニ陷ルヘキハ平時人民ヨリ賦課徴收セテ準備金ヲ積立ル場合ニ於テ
ハ殊ニ看易キ弊害ナリトス但シ非常準備法ニシテ資金其他臨時ノ收入ニ依ル
場合ハ經濟上ノ弊害少カルヘク一國開戦ノ場合ノ如キハ其準備セル正金ヲ國
内ニ消費スルコトハ國民經濟ノ活動ヲ保持スルカ爲メ却テ經濟界ニ裨益ヲ與フ
ルモノニシテ産業上國民ノ蒙ルヘキ擾亂ヲ救済スルニ多少ノ效驗アルヘシ是
レ臨時收入ニ依ル非常準備法ノ特徵ニ非サルモ此場合ニハ經濟界ニ必須ナル
國內ノ流動資本ヲ吸收セルモノニ非サルカ故ニ其弊害無クシテ利益ノミヲ享
有スルコトヲ得ヘキナリ
要之非常準備金ノ方法ハ財政上經濟上非難多キノミナラス政治上行政上事實
濫費ニ終ルコト多シ換言スルハ非常準備法ハ其目的達セラルモ弊害之ニ過

キ又其目的達セラルコト少ナク償金等ノ臨時收入ニ對スル手段トシテハ非
難スヘカラサルモ平時國民ヨリ賦課徴收スル收入ヲ以テ充ツルニ至リテハ何
レノ方面ヨリ觀察スルモ絕對ニ是認スヘカラサル方法ト謂ハムンハ非ラス現
ヤ現時特ニ此非難多キ方法ヲ執ランヨリモ他ニ奏效ノ確實ナル方法完備セル
ニ於テヲヤ即チ我邦ニ於テモ年或程度迄臨時急遽ノ需要ニ應スル爲メ憲法
第六十九條ヲ以テ
避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補フ爲メ又ハ豫算ノ外ニ生シタル必要ノ費用
ニ充ツル爲メ豫備費ヲ設クヘシ
ノ一條ヲ設ケテ明治二十二年法律第四號會計法第七條及ヒ第八條同年勅令第
六十六號會計規則第二章第五款豫備金ノ支出ニ關スル九箇條ヲ以テ其手續ヲ
規定シ一方ニハ凶荒不慮ノ災害ニ對スル非常準備策トシテハ明治十三年布告
第三十一號ハ備荒儲蓄法ヲ制定シテ中央及ヒ府縣ノ儲蓄金制ヲ定メ猶ホ上述
ノ手段ヲ以テ處理スルコトヲ得タル緊急ノ場合ハ憲法ハ第七十條第一項ニ
公共ノ安全ヲ保持スル爲メ緊急ノ需用アル場合ニ於テ内外ノ情形ニ因リ政府

帝國議會ヲ召集スルコト能ハサルトキハ勅令ニ依リ財政上必要ノ處分ヲ爲スコトヲ得ルハハロイモ其ノ權限ハ議會ノ承認ヲ要スルモノナリトノ明文ニ依リ以テ遺憾ナカラシム隨テ今日ニ於テハ非常準備金ニ依ル必要ナク又戰時等ニ在リテ之カ需要ヲ満足スルニ足ルヘキ巨額ノ經費ヲ正金ニ貯藏センコトハ殆ト事實不能ニ屬スルモノト謂ハスンハアラス以テ其ノ終リニ臨ミ尙ホ一言スヘキハ非常準備金ヲ以テ公債ヲ買收スルトキハ内國債外國債何レヲ可ナリト爲スヤニ在リボリユー氏其他有力ナル財政學者ノ論スル所ニ據レハ多ク外國債ヲ以テ勝レリト爲スモノノ如シ今所論ノ大要ヲ述ブレハ内國債ヲ購入スルトキハ其資本ヲ輸出スルノ憂ナク一國流動資本ノ額ヲ減少スルコトナリト雖モ元來此準備タル非常ノ支出ニ備フルモノナルヲ以テ非常ノ場合ハ當該國ノ公債下落スルコトハ當然ノコトナリトス若シ一方ニ外國債ヲ以テセハ一時資本ヲ外國ニ輸出スルノ不利又レトモ此準備ニ充ツル金額ハ歳入ノ殘餘又ハ不時ノ收入ヲ以テスルカ故ニ別ニ費途アルニ非ス隨テ之ヲ輸出スルモ甚シキ損害アリト謂フコトヲ得ス況ヤ其償却ニ因リテ其元金ヲ

報

○鐵物ノ試掘探掘出願中ニ於ケル許可後ノ權利ノ買賣讓與ノ效力
探掘權ハ一ノ財產權ニシテ之ヲ買賣讓與シ又ハ債權ノ擔保ニ供スルコトヲ得ヘキコトハ鐵業條例第二十條第一項ニ規定セル所ナリ但同條第二項及第三項ニ依リ買賣讓與ニ付テハ鐵業特許證ノ書換ヲ受クルニ非サレハ其效力ナク擔保ノ場合ニハ所轄鐵山監督署ノ登錄ヲ受クルニ非サレハ其效力ナシ然ルモ鐵物ノ試掘權ニ付テハ斯ル規定ノ存スルナキヲ以テ買賣讓與ノ目的ト爲スコトヲ得サルモノトスルヲ正當トスヘク況ヤ其試掘出願中ニ譲渡ノ契約ヲ爲スモ固ヨリ其效力ヲ生スルコトヲ得ス此點ハ別ニ疑ナキカ如シ今此問題ニ對スル大審院ノ判決理由ヲ見ルニ曰ク鐵物ノ試掘權探掘權ハ鐵業條例ニ依リ特別ニ許可セラルルモノナレハ其特許ヲ得タル者ハ該條例ニ於テ認許シタル行爲ニ非サレハ爲スコトヲ得サルモノトス而シテ特許ヲ得タル探掘權ハ該條例第二十條ニ於テ特ニ買賣讓與等ノ契約ヲ爲スコトヲ認許セルモ試掘ニ付テハ其規

定ナキヲ以テ買賣譲與ノ契約ヲ爲スコトヲ得サルハ論ヲ俟タル所ナリトス
故ニ原判決カ理由第二項末段ニ於テ上告人ノ抗辯排斥ノ理由トシテ其試掘權
ニシテモ又探掘權ニシテモ其權利ヲ讓渡スルコトハ別ニ禁スル所ニアラザレハ
之ヲ無効トスルコトヲ得スト說明シタルハ讓渡スルコトヲ得サル權利ヲ讓渡ス
コトヲ得ルモノトシタル違法アルモノト謂ハサル可カラスト(大審院明治三十八
年十月八日民事部聯合部判決然ルニ試掘權又ハ探掘權ノ出願中ニ爲シタ
ル特許後ノ探掘權ノ讓渡ハ有效トスヘキヤ否ヤニ付キ同判決理由ニ於テ從來
ノ判例ヲ翻シ明治二十九年第四百四十八號契約履行請求事件ニ對シ本院カ同
年十二月十一日ニ於テ爲シタル判決理由中試掘探掘出願中ニ在テ將來特許權
ヲ得可キコトヲ期シ其權利ヲ買賣スル如キハ法律ニ於テ特ニ禁セサル限リハ
自由ニ之ヲ爲シ得可キ旨判定シタルモ此判例ハ當會審ニ於テ允當ナラスト認
メ云云ト此後段ノ理由ハ果シテ其當ヲ得タルモノナリヤ否ヤ即チ右ノ事實ニ據
レハ探掘權ヲ得タルナラハトノ未必條件ニ繋レルモノト謂フヘク而シテ此停
止條件ハ不法ニ非ス又不能ト限ラサルヘク又固ヨリ債務者ノ意思ノミニ繋

ルモノニモ非サルヲ以テ當事者間ノ契約ハ將來ノ財產權ヲ目的トシタルモノ
ト謂フヘク恰モ予若シ十萬圓ノ財產ヲ作ラハ汝ニ三萬圓ヲ贈與スヘシト云フ
條件附契約ノ有效ナルカ如シ果シテ然ラハ大審院カ從來ノ判例ヲ翻シタルハ
其理由ナキモノノ如シ然リ而シテ大審院ハ單ニ允當ナラスト認メトノミ云ヒ
テ其允當ナラサル理由ヲ示サレナリシハ余輩ノ遺憾トスル所ニシテ切ニ諸君
ノ研鑽ヲ希望スル所ナリ(法學志林第三十七號判例欄參看)
○判事檢事登用第一回試驗合格者 本年施行ノ判事檢事登用第一回試驗ニ
合格シタル者百三十八名中左ノ十六名ハ本校校友ニシテ受験者九十七名ニ對
スル割合一割六分五厘ナリ

小川 彪	木野村 忠夫	秋山 太助
山田 俊平	矢部 安男	田山 卓爾
高原 伊三郎	山本 喜男	神居 繁太郎
堀 謙	祐樂坊 貞郎	松野 嘉七
和田 長平	楠原 保司	佐藤 源二郎

吉田新太郎

尙ホ本校高等科生徒ニシテ同試験ニ合格セラレタル者左ノ如シ

乙 竹 仲 次

篠田國吉

出口元久

岡林清直

千葉公博

○文官高等試験合格者

本年施行ノ文官高等試験ニ合格シタル者四十一名

中本校校友生徒ニシテ合格セラレタル者左ノ如シ

乙 竹 仲 次

伊藤哲英

今泉國太郎

堀 謙一

中野輝松

○校友會東京支部總會

本月十七日本校內ニ於テ東京支部總會ヲ開キ規則

ノ改正、校友推薦ノ件ヲ議決シ後懇親會ヲ開キ古賀學士ノ經歷談、秋山學士ノ可

法官試験、文官高等試験成績ニ關スル報告、梅博士ノ本校校友ノ社會ニ於ケル狀

況ニ付テノ觀察ニ關スル演說等アリ尙ホ筑前縣、尾道ノ餘興アリテ頗ル盛會ナリキ

法學志林

每月一、四、十五日發行
校友、生徒、校外生三限
一冊每冊銀共金九錢
十冊前金銀共金八十錢

第二十七號

十一月十五日發行

志林

○最近判例批評 法律學士 梅 謙次郎
○刑事事件ノ異現象 法律學士 信岡雄四郎

○國領東印度ノ財政一斑 法律學士 岡 實
○我國ノ歲入 法律學士 若槻禮次郎

纂論

○取引所(續) 海山獵夫

解疑

○豫審處分ノ觸託 法律學士 鶴見守義
○戸主タル私生子ノ認知 法律學士 鶴 丈一郎

○交互計算ノ商行爲上ノ所屬 法律學士 松本 丞治
○營業權ノ性質 法律學士 鈴木英太郎

其他 判例、雜報、記事 數十件

發行所 和佛法律學校

明治三十五年十一月廿二日印刷
明治三十五年十一月廿三日發行
(定價金貳拾五錢)

編輯者 東京市牛込區年込北町十番地 萩 原 敬 之

印刷者 東京市牛込區矢來町三番地 小 宮 山 信 好

印刷所 東京市芝區四ノ久保明舟町十一番地 金子 活 版 所

發行所 司法省 東京市麹町區富士見町六丁目十六番地 和佛法律學校

(電話番町百七十四番)

(明治三十二年十二月九日內務省許可)

(明治三十五年十一月四日第三種郵便物認可) 每月十八日、廿五日、廿八日、十日、十一日發行
(明治三十五年十一月十八日、廿三日、廿五日、廿八日、廿九日、卅日發行)